

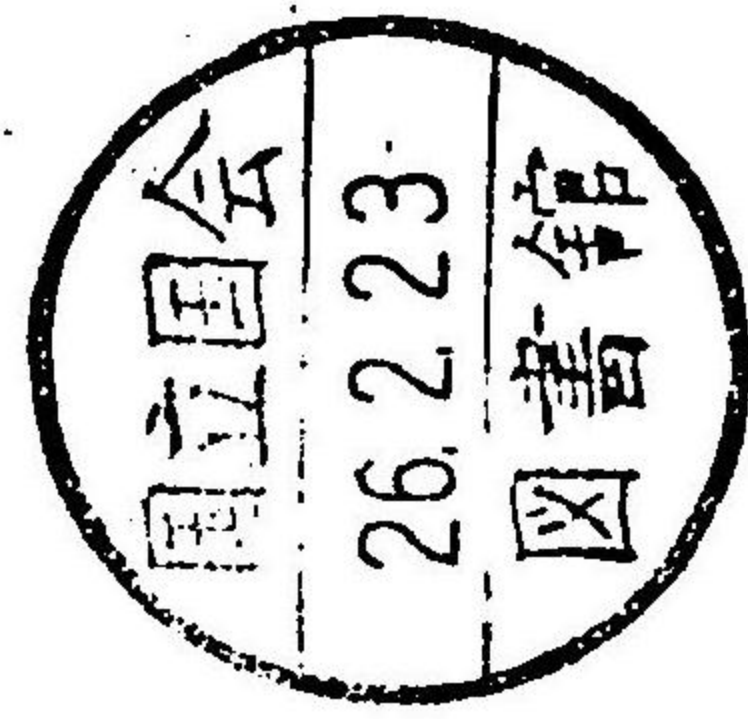
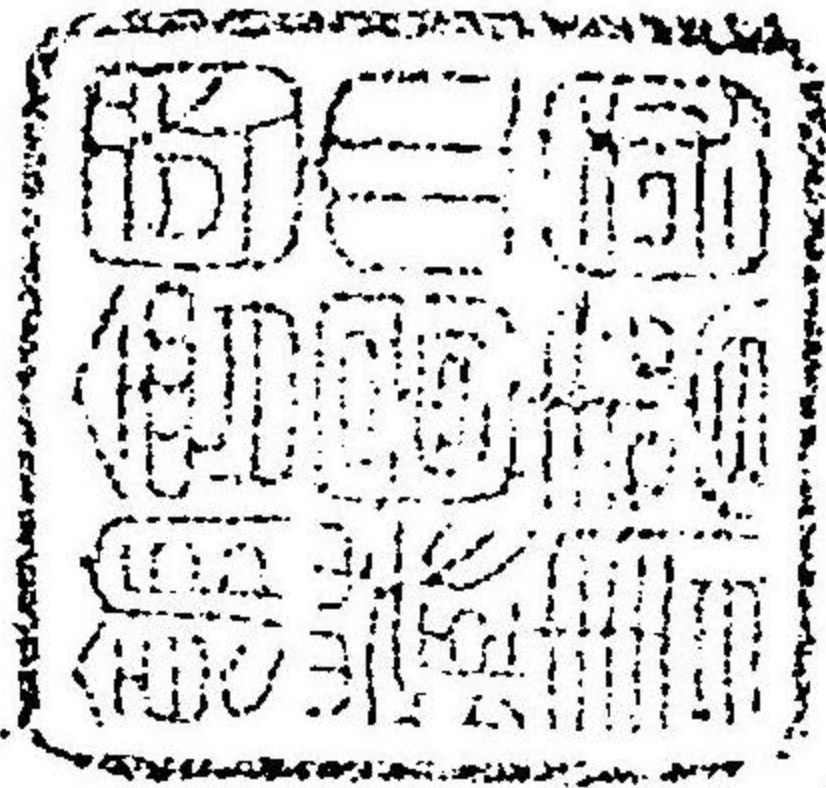
ITV59

文學博士上田萬年校訂

舞子本 全

東京 金港堂書籍株式會社





225552

773.2-M148U

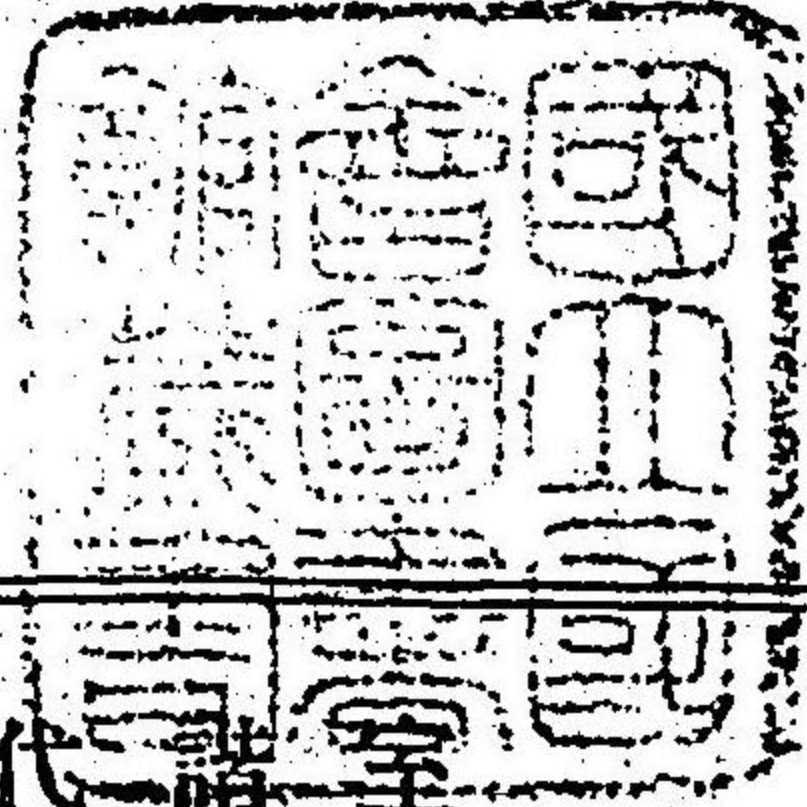
Handwritten Japanese text in vertical columns, appearing to be a transcription of a historical document. The characters are somewhat faded and difficult to read with certainty, but they follow a traditional vertical writing style.

舞の『本硫黄』が島古寫本縮寫



明曆四年刊
つりも縮寫

明曆四年刊 つりも縮寫



緒言

室町時代の文學には謠曲、狂言を始として、御伽草子あり、俳諧連歌あり、義經記、曾我物語などもあり。ことに謠曲は當代文學の花と稱せらる。今、この花とともに、世に紹介すべきものあり。幸若舞の詞、所謂舞の本これなり。

幸若舞一に舞舞ともいふ。源義家より八代の後胤、桃井播磨守直常の孫、宮内少輔直詮の始むるところなり。直詮童名を幸若丸といふ。幸若舞は幸若丸が幼時比叡山にありて、寺僧を慰めんがためにしいでたるものなりと傳ふ。その時代未だ明かならず。されど、應仁別記に

石見太郎左衛門尉ハ三條殿ニ幸若舞ノアリシ終テ群集

人々カヘリニ辻切ノ様ニ山名殿ヨリゾ討セケル
 と見えれば、すでに足利義政の頃より行はれたるを知る
 べし。應仁別記以後徳川以前の書には、幸若舞につきて記
 したるものあまり見當らざれど、幸若八郎九郎義重が織田
 信長より太刀を賜はり、幸若八郎九郎義門が徳川家康より
 槍、脇差、黒印などを賜はりたること、幸若略系に見ゆ。思ふ
 に、應仁以後、能とともに行はれたるものなるべし。
 幸若丸の末は、幸若八郎九郎、幸若小八郎、幸若彌次郎の三家
 に分れたり。徳川幕府時代となりては、三家ともに越前に
 居住して、近く維新前迄、世々幕府の祿を食み、文政の末年頃
 迄は、定時参府して舞曲を將軍の上覧に供したり。
 幸若舞の最も廣く世に行はれたるは、元和、寛永の頃より寛

文延寶頃迄の如し。元和年間に成れる安樂庵策傳が醒睡
 笑には、特に舞の部を設けて、種々の失錯談を掲げたり。新
 見正朝の昔々物語にも、昔は幸若舞はやり、振舞の節呼ぶ。
 幸若八郎九郎、その外、傳右衛門、市右衛門など數十人存之云
 云と見え、春臺の獨語にも、寛文、延寶の頃迄、諸侯、貴人の宴饗
 にもこれをを用ひて、心を慰め、酒をもすすめけるに、元祿の比
 より、猿樂盛んになりて、幸若の舞世にすたれたり。と見ゆ。
 幸若舞につきては、天和年間に成れる雍州府志の傳ふると
 ころ、最もその要を摘めり。曰く、

又一種有舞舞。凡舞有兩流。越前幸若流并大柏流是也。幸若
 自稱桃井直常之裔。代領公方家之祿。其舞詞或戰場之事。
 盛衰之變、戀慕之情、種種有三十番。其後所作是號新曲。其所

唱曲節音聲與猿樂之所唱大同小異。是亦有大夫。其左右二人連舞。是稱連。又謂脇。大小鼓助之。

と。

舞の詞は、貞享の書籍目録に

大織冠	滿仲	志田	百合若大臣
夜討曾我	十番切	富樫	笈さがし
高館	敦盛	景清	烏帽子折
八島	伏見常盤	文覺	鎌田
築島	新曲	和田酒盛	いづみが城
元服曾我	小袖曾我	四國落	常盤問答
堀川夜討	笛の巻	いぶき	硫黄が島
馬揃	未來記	木曾願書	那須の與一

濱出

入鹿

清しげ

腰越

の三十六番を掲げ、後の群書一覽には、鎌田、いづみが城を除き、夢合、劔讚談を加へて、同じく三十六番とせり。されど以上三十八番の外に、張良、靜切兼曾我、鞍馬出となほ數番あり。

舞の詞の何時何人の手に成りしか明かならざるは、なほ諸曲、狂言などの明かならざるが如し。嬉遊笑覽その他には、單に義經記、曾我物語などと同時代の作なるべしといへり。されど、この二書はともにその時代明かならざる書なり。加ふるに、曾我物語の如きは異本數種ありて、流布本の如きは、後世潤色を加へたるものの如く、その流布本にのみ見ゆることの舞の詞にもあるが如きことありて、容易にその時

代を明め難し。要するに舞の詞も、謠曲が足利義滿の頃より豊臣秀吉の頃迄に次第に成りしが如く、逐次に成りしものと見るが穩當なるべし。舞の詞には、平家物語より出でたるものと、義經記、曾我物語と材を同じうするものとあり。また、その出處明かならざるもの數番あり。この出處明かならざるもの、最も古きが如し。大織冠、入鹿、百合若大臣などこれなり。謠曲と舞の詞とは、ともに平家物語の一變したるものにして、その性質を同じうするところ少なからず。ただ舞の詞の謠曲よりも、所謂語句多くして引句少なきの差あるのみ。ともにその材を多く源平時代に取りて、同種の佛教思想に富めり。謠曲に關原與市、烏帽子折あれば、舞の詞にも鞍馬

出、烏帽子折あり。またかれに安宅、八島あれば、これにも富樫、八島あり。その他、鎌田、景清、敦盛、元服、曾我、切兼、曾我など皆その材を同じうし名を同じうせり。甚だ密接の關係を有するものといふべきなり。文體よりいへば、前人の佳句麗詞を補綴して律語の體をなせること、遂に謠曲に及ばずして、まゝ御伽草子に似たり。舞の詞の文體は謠曲と御伽草子との中間にあるものといふべきなり。

謠曲、舞の詞、御伽草子は、ともに徳川時代の淨瑠璃、小説のよつて起りたるものなれども、そのうち最も淨瑠璃に關係あるものは舞の詞なり。所謂古淨瑠璃と稱せらるるものは、文體最も舞の詞に近し。かつ早く六字南無右衛門が、舞の高館、八島などを語りたることもあり。その他、築島、志田、和

田酒盛、大織冠、百合若大臣など、何れも淨瑠璃の六段物となりて現れたり。

本書はさきの四十餘番のうちより、義經記と材を同じうせるもの六番、平家物語より出でたるもの四番、曾我物語と材を同じうせるもの二番、出處不明のもの三番、合せて十五番を選べり。

このうち、百合若大臣は、近松巢林子の手に百合若大臣野守鏡となりて現れ、鳥帽子折に見えたる山路が草薙笛もまた用明天皇職人鑑となりて現れたり。その他入鹿のうちに見ゆる鎌足が盲目をまねびて、幼時狐より與へられたる鎌もて、入鹿を誅することも、同人の作大織冠のうちに見ゆ。ひとり巢林子のみならず、紀海音の作、立宗皇帝蓬萊鶴に見

ゆる、楊貴妃と虞子君とが骰子を争ふ一段の如きも、和田酒盛の引事を移したるに似たり。

舞の本は、早く明暦の頃刊行したれども、世に遺れるもの極めて尠し。本書は一に寛永頃の古寫本により、曲節、句切、みなこれに従へり。唯、百合草若大臣一番のみ曲節、句切なければ、普通の句讀を施して、見易からしめたり。また、當時普通に誤用せられたる、おとを、をとほ、うとふなどの假名遣を正し、見易からしめんが爲めに、假名に漢字を宛てたる所多し。漢字を宛つるにいかかと思はるるものはこれを括弧のうちに置きて傍書とせり。また括弧のうちに入れずして傍書とせるものは、義經記、曾我物語等に見えたる文字をあてたるものなり。

刊本には、稀に句切を施したるものあれど、曲節を示したるものなし。本書の曲節のあるところ、珍とするに足るべく、また、平家、謡曲などとの關係を研究するに、缺くべからざるものなるべし。

明治三十七年五月

校訂者しるす

舞の本

目次

未來記	一
鞍馬出	一二
烏帽子折	二四
富樫	七三
笈さがし	九五
高館	一二四
硫黄が島	一七〇
文覺	一八一

敦盛	二〇九
奈須の與一	二四四
元服曾我	二五三
和田酒盛	二六九
入鹿	三〇三
信田	三二二
百合草若大臣	三八〇

舞の本

上田萬年校訂

未來記

去る間牛若殿。鞍馬の奥僧正が崖と云ふ所へ。夜な夜な
 通ひ給ひけり。天下を治めんその爲に。兵法稽古の嗜な
 り。抑兵法と申すは。三略の術書たり。昔大唐あやう山
 のぞうけいが傳へし秘書なり。吉備の大臣入唐し八拾
 四卷の中より。も四十二帖に抜き書きて。我が朝へ渡さ
 れしを。坂上の利仁九年三月に習ひ。敵を鎮め給ひけり。
 さてその後。田村丸。十二年三月に習ひ。奈良坂山のか
 なつむて。鈴鹿山の盗人。斯かる逆徒を平げ。天下を守

舞の本 未來記

り給ひけり。さてその後、廢り叡山に籠められしを
白河院ちのこのかうべ。習ふとは申せども。さした
る勇はなかりけり。去る間、牛若殿、只山壑を走り廻り。
枯木の枝を傳ひ。御身を輕め給ひけり。爰に天狗どもさ
し集り。内議評定する様は。そもく當山は。慈覺大師
の秘所として。行人ならではこの山へ通ふものもなかり
しに。鞍馬寺の牛若が。我等が棲家を嘲る事。その謂れ
なき物を。いざや天狗の法罰を。當てんなんと申しけ
り。愛宕の山の天狗。太郎坊申す様。そもくこの兒
不用にて。親にも師にも不孝ならば天狗の法罰當つべけ
れども。父母孝養のその爲に。兵法稽古の嗜なり。父母
に孝養有る者は。必ず天道の加護を蒙るに。罰し給はん

詮議こそ。然るべくもなしといふ。比良の山の次郎坊。
進み出でて申す様。そもく我等が異名を天狗といふは
謂れ有り。昔は人にて候ひしが。佛法を能く習ひ我れよ
り外に智者なしと。大慢心を起す故。佛には成らずして。
天狗道へ落つるなり。たとへ慢心多くして。この道へ落
つるとも。情を如何で知らざるべき。いざや牛若合力し。
天狗の法を免し。親の敵を討たせん。尤然るべしとて。
宗徒の天狗七八人。若山伏にいて立ち。牛若殿の前に行
き。如何に少人聞召せ。抑この邊に人住む所候へば。御
出で有つて暫く。御遊び候へや少人ところ申しけれ。
牛若殿は聞召し。これ唯者と思さねど。何の仔細の有る
べきと思召されける程に。山伏の肩に。乗り其處とも知

らぬ山を行き。深き谷に分け入り。何處迄牛若を。具足
するぞ怪しやと。思召されける程に。山の氣色と木の木
立。かんれい峨々と聳えて。萬木枝を並べては花しやう
るんに。盛なりりりたる香は香うばしく。松柏綠色深し。
瀧の音玲々と。響き岩間を潜る音。是れや寔にしやうり
やう山のききとく苑かと疑はる。爰は本堂併びに拜殿玉
を磨き神殿に珠玉を聯ね。九重の塔は。雲に聳え。坊中
棟を并べつつ。門々藁を續けたり。斯程目出度き御寺の。
此の仙谷に有りけりと。思召され。ける程に暫く立ちて。
おはします。
コトバ かけりける所に。ある大坊の客殿に。宗徒の大衆百
人許り連座して。管絃講の遊び。笙ちやく琴箏篋絃管を

調べ。面白かりける座敷なるが。牛若殿を見付け参らせ。
管絃を止めてうしやう申し。遙の座上に据ゑ参らせ。
山河の美食を調べ。珍饗を盡して遇し申す。亂舞になれ
ば天狗共。我れ劣らじの遊び事。てんこつの物の上手が。
無盡の曲を盡して。我れ劣らじとぞ狂ひける。老僧達申
されけるは。遊び許りにて事ゆくべきか。源平の合戦の。
この末に有るべきを。豫ねて知つて侍るなり。少人の御
遇しに。まなびて御目に懸けよといふ。承ると申して。
ゆゆしげなる天狗が。これは平家の大將。安藝守清盛と
名乗つて進み出で。安藝の國嚴島の明神の。御計らひに
よりつつ。この世を今より治むべし。平家に野心の有る
者をば。都の内に置くべからず。薩摩瀧硫黄が島へ流す

べし。法皇をば鳥羽の古宮に籠め奉り。清盛が子供いよ
いよ繁昌し。一門六十三人は。何れも官祿重かるべし嫡
子次男は左右の大臣。孫は國王。或は百官卿相なり。
あぶれ源氏の末々を胤を断つて亡すべし。南都に敵
が籠ると聞く逆徒強くて。手に餘らば大佛殿に火を懸け
よ。うけたまはると申して。ゆゆしげなる天狗が。本
三位の中將重衡と名乗つて。三千餘騎を率して。南都へ
押し寄せて。大佛殿を焼き拂ふ。春日の御咎め強くして。
既に早清盛は。火の病を請け取つて。焦熱地獄のかなや
の焔。争でこれには勝るべき。あら暑や悲しやと。こが
れ死にこそ死んだりけると。斯様に清盛の。早一期を語
つて。颯と入る。斯かりける所に。ゆゆしげなる天

狗が。これは平家の世嗣。右大將宗盛と名乗つて。冠束
帶の装束にて。ゆゆしげにて坐せられたり。不思議や平
治の亂の時。伊豆の田中へ流されし。頼朝世を亂り。伊
豆の目代山木を撃つて。相模の國石橋山に幡を靡かせ楯
をつく。大庭の三郎押し寄せて。石橋山を射落す。頼朝
主従七騎にて。武藏の國へ落ち給ひ。ここの六所ぶんば
いに幡を靡かし。續く味方を待ち給ふに。われもくと
參ぜられけるを。着到付けて見給ふに。夜日三日がその
内に。頼朝の御勢三十八萬七千餘騎。旗の下に相靡き。
先陣は相模の國。小林の郷に京を立て。新鎌倉とざざめ
く。爰に信濃の住人に。木曾の冠者義仲は。平家を攻め
んその爲に。五萬餘騎を率し。信濃の國を打つ立つて。

越後の府に着きしかば。越路に懸かり攻め上り。都間
近き越前の燧が城に陣を取る。平家の人々肝を消し驚き
騒ぎ給ひて。十萬餘騎にて都を立つて。近江の國とかや
荒乳を越えて。ちのめ山打ち越え。かへるの山に陣を取
る。源氏は屈竟の城廓に籠つて。左右なく落つまじかり
しを。或人のたばかりにようこくの關を破られ。怵へ兼
ねて落ち給ふ。平家後より攻め續く。加賀の國篠原安宅
の戦は。天地も響く許りなり。其處をも義仲打ち負けて。
加賀越中の國境俱利迦羅山に陣を取る。平家の人々勝に
乗り。彼の山へ攻め上る。その時源氏の氏神。八幡大菩
薩の。御計らひによりつつ。平家三萬六千餘騎は一夜が
内に俱利迦羅の。谷の朽木と滅び果つ。平家逃げて上り

しを。源氏後より責め懸かる。平家都を落され神器を取
つて遙なる。福原の京に落ち給ふ。去る間義仲は。
天下を守護し奉り。ゆゆしく見えて今は早。木曾の政道
たるべきが。頼朝の果報に蓋はれ。代を背くべき瑞相有
り。
平治の逆臣は流石情の有りつるに。ああら憂かり
けるかな源氏の逆風。四海に吹き荒れて。雲の上迄浪高
し。頼朝聞召されて。君を守らん爲にこそ。義仲都の守
護ともあれ。却つて天下を悩ますは。重ねて凶夷なるべ
し。その儀ならば討手を上せんとて。大將には蒲の冠者
範頼。この牛若殿元服して。九郎義經と名乗るべし。牛
若をば鞍馬の多聞。伊勢の兩社。守り守護し給ひ。さん

よ^カうを^カ顯^カし。箕^カ裘^カの家^カを^カ繼^カぐ^カべ^カき^カなり。これ^カによ^カつて^カ範^カ頼^カ義^カ經^カを。兩^カ大^カ將^カと^カ定^カめ。都^カへ^カ攻^カめて^カ上^カる^カべし。無^カ慙^カや^カな^カ義^カ仲^カは^カ天^カ下^カの^カ嫉^カまれ^カ朝^カ威^カの^カ罰^カ弓^カ箭^カの^カ末^カも。類^カれ^カ果^カて^カ粟^カ津^カが^カ原^カで^カ討^カたる^カべし。義^カ經^カ都^カの^カ警^カ固^カとして。三^カ種^カの^カ神^カ器^カ事^カ故^カなく。都^カへ^カ返^カし^カ申^カさん^カと。三^カ草^カの^カ峠^カ鴨^カ越^カ搦^カ手^カを^カ廻^カし^カ攻^カめ^カ入^カる^カべし。平^カ家^カ怵^カへ^カて^カ城^カを^カ落^カつ。汀^カの^カ水^カ屑^カと^カなり^カ果^カつ^カる。終^カには^カ西^カ海^カの^カ赤^カ間^カ門^カ司^カ壇^カの^カ浦^カ。早^カ柄^カが^カ沖^カにて。二^カ位^カ殿^カ先^カ帝^カ。宗^カ盛^カを^カ始^カめ^カ奉^カり。平^カ家^カ三^カ萬^カ六^カ千^カ餘^カ騎^カは^カ水^カの^カ泡^カと^カ消^カえ^カ果^カつ^カべし。さて^カその^カ後^カに^カ牛^カ若^カ殿^カ。兄^カに^カ嫉^カまれ^カ給^カふ^カな^カよ^カ梶^カ原^カに^カ心^カ許^カす^カべ^カか^カら^カず。兄^カ弟^カの^カ中^カ。不^カ和^カな^カら^カば。そ^カの^カ身^カの^カ運^カは^カ盡^カく^カべ^カき^カなり。六^カ親^カ不^カ和^カに^カし^カて^カ三^カ寶^カの^カ加^カ護^カは。よ^カも^カあ^カら^カじ。

カクツメ ここ^カま^カで^カ末^カを^カば^カ教^カへ^カぬ。さて^カその^カ後^カを^カ知^カら^カぬ^カなり。これ^カ迄^カ請^カじ^カ參^カら^カせて。對^カ面^カ申^カす^カし^カる^カし^カに^カは。天^カ狗^カの^カ法^カを^カ許^カす^カなり。これ^カを^カ守^カり^カに^カ懸^カけ^カよ^カと^カて^カ鐵^カの^カ玉^カを^カ取^カり^カ出^カだ^カし。牛^カ若^カ殿^カに^カ參^カら^カせて。搔^カき^カ消^カす^カ様^カに^カ失^カせ^カけ^カれば。あ^カり^カし^カ所^カは^カ打^カち^カ失^カせて。僧^カ正^カが^カ崖^カなる。松^カの^カ枝^カに^カぞ^カお^カは^カし^カける。さて^カは^カ天^カ狗^カが^カ牛^カ若^カを。か^カと^カへ^カける^カよ^カと^カ思^カ召^カし。東^カ光^カ坊^カに^カ歸^カら^カる^カる。

鞍馬出

扱ても六波羅の御所には。牛若殿の悪行の身に餘ると聞
召し。御一門さし集つて。御評詮はとりどりなり。彼の
者生立つものならば。當家のゆゆしき大事たるべし。打
つて捨つるか。忍びて流すかなんと。評詮ある。母
の常盤は聞召し。あるにあらぬ御身に。忍びて文を
遊ばし。牛若殿につけ給ふ。牛若文を御覽じて。かやう
に母の御手より。文を賜り。何處の國。誰やの人を。頼
みて。下るべしとも覺えずや。所詮牛若。御本尊よ
り外頼み申す方もなしと。講堂に御参りあり。夜とも
祈請を申されたり。抑毘沙門と申すは。四天の中の第一

に。八天童の尊者たり。佛法護持のために。弓箭を守り
給ふなり。牛若が一期の本望は。身のため起す謀叛なら
ず。父母孝養のそのために。平家を討たんと思ひ立ち。
兵法稽古の嗜なり。多聞の十種の福をば。父母孝養
せんものに。與へんといへる誓なり。本誓今に違は
ずば。牛若にこそたぶべけれと。深く祈誓を申し。うち
まどろみたる御夢に。白き兔と。鼠とが。袂に入ると御
覽じて。うち驚き思召す。兔は東の物。鼠は北の生物な
り。東北の隅をば。丑寅とこそ名づけたれ。伊舍那天と
申すは。此方におはします。故に名づけつつ。多聞天と
申すなり。毘沙門の住家をば。へいしらまなやしやうと
て。米の降る都なり。如何様も牛若は。丑寅の方に立ち

越えて。世に出でよとの示現かや。あら不思議やな。北
と東の間には。誰やの人を頼みて。下るべしとも覺えず
と。まだ幼き御心に。つくづくと案じ給ひけり。
尊者と覺しき男の。有徳の人と覺しくて。道者四五人入堂す。
尊き入れ。珠數さらさらと押し揉んで。御鉢に黄金を
間を。安穩に守り給へと。深く祈誓を申さる。その後
格子の内よりも。五十許りなる僧出で。御道者は何處の
人ぞ。態の参りか。便宜さうか。いや便宜ながら態と参
りて候ぞ。側なる法師がこれを聞き。御邊は未だ知らぬ
か。あれこそ都に隠れもなき。三條の金商の吉次殿よと
いひければ。あう去る事あり珍しや。奥よりも何時の比

の。御上りぞ。去年の冬罷り上りて候が。餘寒やう／＼
打解けば。この間に罷り下り候べし。さもあれ音に承る。
秀衡殿と申すは。如何程の分限の人ぞ。秀衡殿と申すは
五十四郡の總追。捕使。白川の關よりも。東は殘る所ま
しまさず。在應國民相從ひ。勢を持つ事は。その數を知
らず。日本半國よりなほ大き分限とこそ承れ。扱て其の
人は奥州の住人か。いや都の人と承るが。一年源氏の御
大將。八幡殿と申せしが。奥へ下らせ給ひ。貞任宗任安
任を平げ御上洛の御時。奥州の守護代を。彼の基衡に下
したぶ。五十四郡の國人は。みな基衡に思ひつく。剛き
を和げ。弱きを撫で。民を憐び政事御法に任せて執行ふ。
國の靡き從ふ事は。草木の風に靡くが如くなり。かくて

奥を治めつつ。秀衡殿の代には。吹く風も聲を止め。立つ浪も岸を洗はず。よき大將と承る秀衡殿と申すは。ぞくしやうよき人にて。國をもよく治め給ふ。七珍萬寶飽き満ちて。ただ長者の位と申すなり。

牛若殿は聞召しこれは多聞の詫宣や。秀衡は先祖の下人。頼み下るものならば。情無くはよもあらじ。吉次を頼み道伴して。下らばやと思召し。吉次と深く約束をめされ。東光坊に御歸りあり。常の所に御入あつて。旅の出立をしたまふに。涙も更にせきあへず。何時も御身をはなされぬ。金作りの御帶刀。こんねんとうの腰の物。これぞ忍びて持たれたる。召仕はれし童の。藍摺の直衣に。御身の召されたる。精好の大口を。召し替へさ

せ給ひ。御髮唐輪に高くあげ。七歳の御年より。住み慣れさせ給ひたる。東光坊をただ一人。小夜に紛れて出て給ふ。流石に御寺の御名残かたへの兒達こじ同宿の名残とも。愛念深き人多し。未來をかけて契りしもの。今も知らせてあるならば。前後を守護し行くべけれども。人目を忍ぶ旅なれば。ただ一人ぞ御出ある。志こそ哀なれ。

師匠に名残の惜しければ。紀念のためと思召し。一首の歌をぞ残されたる。思ひきや身を奥山に住居して。このみ一つになりゆかんとは。かやうに詠じ給ひ。庭の名木名石ともを。何時の世にかは立ち歸り。又見んずらん味氣なや。桃李物いはねば。我が出でぬるをよも告げじ。梅鶏舌を含めども。など曉を知らせぬぞ。扱て本坊

を立ち出で。地主権現伏し拜み。あか井の水もさへ曇り。影さへ宿す。月もなし。七つに曲る鞍馬坂。夜更けて物うき道の邊を。貴船の神の社こそ。かつ頼母敷く聞えけれ。名残ぞ惜しき市原の。立ち止まりて。御菩薩池。千早振るらん上賀茂の。道を糺の森過ぎて。夜はほのぼのと白河や。吉次に今も粟田口。早や松坂に牛若殿。程なく着かせ給ひけり。

待つ吉次は見えずして。美濃の國の住人。關原の與市。わうばんを請取つて。夜を日についで上りしが。その夜は大津に宿り松坂のあたりにて。牛若殿に参り合ふ。牛若殿は御覽じて。源氏の物への門出に。平家の郎等に逢ふところは。無念なり。如何様彼奴に見合ひ。都に披

露せさせては。悪しかりなと思召し。扇をかざし。編笠を傾け。去らぬ體にて御通ある。與市が馬と申すは。あけ六歳の野取の駒。物を見てはきれやすし。脊に降つたる雨水の。道に溜りて有りけるを。そぞろに蹴上げける程に。牛若殿の直垂は。ただ絞る許りに濡れにけり。牛若殿は御覽じて。駒の足立しとるなり。悪しくも行き逢ひけるやとて。其方も見ず逃げ給ふ。與市らくに誇つて。逃ぐる心のいたいけさに。手綱も執らで蹴かけたり。牛若殿は御覽じて然るべくば御馬を靜に打たせ給へよ。我等が様な童こそ。蹴上の水をば厭はずとも。都方の弓取の。咎むる方も候べし。手綱に餘らばその馬を。捨てて御通り候へ。あつたら馬を捨てうより。やあ下りて引

けとの御説なり。與市無念の詞を聞き。子程の者にあてられて。返事をせぬものならば。京田舎の物笑となるべし。又知らぬ體にて通りたらば。さして難にもなるまじきを。運の極めの悲しさは。あれ程の童。あつれば路次の狼藉。あてねば時の恥辱。太刀の峰にて打ちふせて。追ひ失へと下知をする。承り候とて。若黨三人中間六人以上九人の者ともが。太刀長刀の鞘をはづし。聲許りにて威さんと。おれはくとぞ威しける。牛若殿は御覽じて。己等が有様は。稻荷祭か祇園會か。賀茂の祭の物真似か。具足に風をひかせんとや。恐ろしうもないぞとて。からくとぞ笑ひける。與市この由聞くよりも憎い奴が詞かな。具足よこしに切りばしすな。太刀の峰にて打ち

ふせて。追ひ失へと下知をする。承り候とて。眞中にとりこむる。牛若殿は御覽じて。僧正がかげにて。習はせ給ひし天狗の法。出逢ふ所と思召し。大勢の中へ割つて入り。向ふ者を拜切。馬手へ廻るは車切。弓手へ受けて左太刀。寄せてはかへすさざ波切。梢をもむは嵐切。天狗倒しの笑切。爰はと思ふ秘事の手をば。残さずこそは使はれけれ。牛若殿の御帶刀。ひらめくと見えしかば。手の裏未だ反へさぬ間に。六人死んで三人は。痛手負うてぞ平伏しける。與市この由見るよりも。あれ程の童。たとへば十四か十五かに。如何程も餘らじ。手並見せんといふままに。駒かけ寄せてちやうと打つ。牛若殿は御覽じて。彼奴は日本一番の。をこの者にてありけるや。

直に切て捨てては。思出のあらばこそ。なぶり切に彼奴
をして。遊ばばやと思召し。請太刀になつてぞ廻りける。
與市この由見るよりも。さればこそこの童。逃げて行く
か何處まで。逃がさんとやあ投げかけく切つたりけり。
牛若殿は御覽じて。何時まで彼奴をなぶるべきと。思召
し。弓手にきれてかひちがひ。與市が馬の三頭を。ひら
き打にちやうと打つ。馬は打たれて跳ねければ。鞍だま
に取られて。眞逆様にとうと落つる。起さんくとする
所を。走りかかつて峰打に。ちやうくとぞ打つたりけ
る。少しもくぼき所にて。雨水に濡れにけり。牛若殿は
御覽じて。あう勿體も候はず。兒と女には御免さうかや。
馬より下るる慇懃さよ。御供の者は何處にあるぞや。あ

あの馬ひいて與市殿を乗せ申せ。それくとありしかど。
返辭する者なかりけり。牛若殿馬を引き寄せ。これに召
されて。御歸り候へや。與市殿とありしかば。與市餘り
の恥かしさに。馬も下人もふり捨て山科寺の傍に。深く
忍うで居たりけり。それよりも牛若殿。奥へ下らせ給ひ
て。天下を治め給ひけり。

烏帽子折

抑頃は安元元年三月中旬に。源の牛若殿鞍馬の寺を御出
あり。今日喜に近江なる野路の宿にて吉次信高に行き逢
はせ給ふ。その日のとまりは鏡の宿。吉次が宿は菊屋と
聞うる。鏡の宿の遊君。雑餉構へ吉次殿をもてなす。去
る間吉次順の盃くだし逆の盃とばせければその後は酒盛
になる。
クドキ あら痛はしや牛若殿は。人目をつつませ給ふ間切
戸のわきにすごと。ただ一人たたずみ給ふ。ここに
平家の侍大將監物太郎よりかた悪七兵衛景清。早馬に乗
つて馬場の宿よりも觸れて通りけるは。この路次を十六

七の少人の。通らせ給ふことのあらば。都へ御供申し上
りたらんずる輩に。上下をえらまず勲功あるべしと觸れ
てその日に都へ通る。
牛若殿聞召し。この儀にてあるべくば。なにしに鞍馬を
ば出でけるぞや。夫れ八正のおほち廣しと申せども。年
にも足らぬ牛若が。身の置所のなきこそ何よりもつて口
惜しけれ。あう思ひ出したり。只今は兒とこそ觸て候へ。
男と觸てあらばこそ。所詮男に成りて下らばやと思召し。
下女を近づけ。なうこの邊に烏帽子折ばしさうか。下女
承はりて。今日都より下らせ給ふ人の。これにて烏帽子
を御尋候や。さりながら御望にて御座候はば。あの向ひ
なる高雲雁のうちこそ烏帽子の上手にて候へ。牛若斜に

思召し雲雁のうちへ尋ね入つて。案内申さう。うちよりも誰そとこたふる。苦しうも候はず吉次信高の供して下る冠者にて候が。烏帽子の所望に参りて候。その時烏帽子折牛若殿を請じ申し。烏帽子箱取り出し。冠者殿の召されうずる烏帽子は。大きびざうか。しんせいやう當世様。如何様なるを召されうぞ。御好み候へ。やがて折つて参らせう。牛若殿聞召し。烏帽子はただ黒ければ黒しとばかり心得つるに數多の名のありけることよ。何とな折らせうな。思ひ出したり我等が先祖は左折を召さるると承り及びてあれば。人數ならぬ牛若も。左へ折らせて着ばやと思召し。なう大夫殿。この冠者が着うずる烏帽子は。それなる大きびのつぶのちと荒らかなるを。一

くせくせませ。雛形にあひをあらせ。櫛形をいぐと。一ためためて左へ折りてたび候へ。そのとき烏帽子折がもつての外に腹を立てさればあのやうなる下郎に物を好まずれば。我が身の果々の程を知らず。事も忝なや。左折を召されうずる人は。一とせ尾張の國野間の内海にて失せ給ひし。左馬頭義朝。その御子にて御座ありし嫡子悪源太義平。次男朝長。三男頼朝。四郎はあのの御曹司。五郎は遠江の蒲の御曹司範頼。六は醍醐の京の君。七は園城寺の悪禪師の君。八男にあたらせ給ふ。當時鞍馬の寺に御座ある。牛若殿様こそ召されうずるにやう和殿原がやうなる三界流浪の。吉次が供をする冠者が。左折を。着うずる事思ひも寄らぬ所望かな。牛若可笑し

く思召し。仰は左にてさふらへど。奥へ罷り下らうず。關々泊々にて、左折を着たるよと。人の咎めのあらん時。都の宿に。古き烏帽子のありつるを所望してきてさうが。左折も右折も。この冠者は。知らぬなりかかるむつかしき烏帽子を。關屋に預け申すというて。打棄てて通るならば御身の難も。あるまじきわつばが科も。のがるべし。コトバ、ツキ 烏帽子折承はり。如何様これはやうある人の言葉遣ひぞと思ひ。あう一旦は申すまでというて。左へ折りすまして参らす。牛若殿は烏帽子とりまはし御覽じて。よい烏帽子にて候が一つの難が候。太夫聞いて。地に難が候か。さびにくせが候か。雛形櫛形小結所。いづくに難が候ぞ。牛若殿聞召し。いづくに難も候はぬが。

我が所望の如く烏帽子をば折らせ参らせて。代を持ち合はせざるが一つの難で候太夫聞いてからくと打笑ひ。あらことごとしの冠者殿の申ごとやあの吉次殿は。一年に一度。二年に二度の下り上りする。その供して下る冠者なれば心。安く思はれよ。冠者殿が奥餞に取らせうぞやう。牛若聞召し。世にあり顔なる取らせ詞かな。牛若が世に出るならば家の疵ともなるべき詞なり。太刀を取らせて行かうすが。それは千五百里の道の用心ことかくる。刀をとらせて行かばやと思召し。源氏重代のこんねんどうの御腰物を。取り出させ給ひて。なう太夫殿。この刀をば烏帽子の替とばし思召すな。烏帽子の替には明年の夏の頃。奥よりもよき馬を用意申さうず。暇申して

太夫とて。宿に歸らせ給ふ。
 その後鳥帽子折女房を近づけ。この年月かかる下さいを
 仕り。身命を助かるを。されば佛神三寶も不憫に思召さ
 るるによつて。この刀たまはる。見給へこれは皆黄金ぞ。
 都の町にて沽却して。一期のうちをらくくと。過ぎう
 ずる事の嬉しさは如何に女房聞いて何と物をばいはずし
 て。太夫が持ちたる刀を唯一目見てやがてさめざめと泣
 く。太夫大いに腹を立て不思議の女房の風情やな。
 をのこの寶まうけて喜ばば共に喜ばずして。和御前は何
 を歎くぞ。女房聞いて今は何をか包み候べき。扱て
 は只今鳥帽子折らせ給ひたる冠者殿は。自がためには三
 代相思の主君にて御座候ひけるぞや。それを如何にと申

すに。御身の持たせ給ひたる刀は。源氏御重代のこんね
 んとうと申す刀。自をば如何なる者と思召す。ぞこれは
 一年尾張の國野間の内海にて失せ給ひし義朝の御内。鎌
 田のためには妹なり。君に離れ参らせ身の置所のなきま
 まに。御身に契をこめ。此年は九年になり候。九年の情
 にこの刀を自にたべかしなう。我が君の奥州へと。は
 るばるお下り。ましますに奥餞に。参らせん。太夫
 聞いて共に涙を流し。中々のことかな。夫婦借老同穴の
 わりなき妹脊の中なれば。何をか和御前に惜むべきと。
 やがて女房に取りらする。女房斜に喜び。瓶子一具口つつ
 ませ。小結取り添へ吉次が宿へ尋ね行き。牛若子に逢ひ
 奉り。なう若君。自をば如何なる者と思召すぞ。これは

一年故君の御供申し野間の内海にて失せたりし鎌田がた
めに妹なり。男子の身にも候はば御最期の御供申
すべきに。たとへ女にて候とも。如何ならん淵瀬にも。
身を沈め果つべきこそ殉死にては候へども。棄てがたき
は命つれなくながらへ。面目なくは候へども。烏帽子折に
契をこめ。今年は九年になり候。九年の情にこの刀太夫
に所望し。我が君の奥州へはるばる御下りましますを。
一目拜み。申さんためにこれまで参りて候ぞや。夫
れ烏帽子を着るには。小結を結うて着ること候。御烏帽
子をたまはれ小結を結うて参らせんと。はしげたやうに
雲井にさつと結び上げ。あら目出度やこの烏帽子を召さ
れ。奥へ御下りまし。て秀衡佐藤を頼ませ給ひ。數萬

餘騎を引率し。平家の人々を。御心のままに亡させ給ひ
今一度日本を御代になさせ給へ。暇申して若君とて。女
房宿に歸る。牛若心に思召すものへの門出に。先祖の郎
等に行逢ふことよ。夫れ烏帽子を着るには。二人の親を
とる習のありと申すが。牛若は誰を烏帽子親にとらうず。
あう思ひ出したり。我等が先祖は七歳の御年八幡へ御参
ありて。八幡太郎義家と名乗らせ給ふ。その如く牛若も。
片親には氏神八幡をとり申さうず。片親にはこの年月住
み慣れし。鞍馬の大悲多聞をとり申さうず。太刀は多聞
の劔。刀を八幡と心掛け。ないの柱に立て寄せ。九つの
元結を自召され。御ぐしを御生やしあり。烏帽子ためつ
けて召され。瓶子の酒を自らうつし。太刀の前にも三々

九度。刀の前にも三々九度手向け。その後御身も御めし
 ありて。クドキさもあれ今夜の客人が。名をば何と申すぞ。
 假名は源九郎實名は。義經と申すなりと獨語をしたまひ
 て。式の祝を遂げさせ給ふ。あら痛はしやこの君の。御
 代が御代にて御元服ましまさば。天下の諸侍。参り奉公
 申すべきに。浮世に住む習とて。呼ぶも。應ふるも。唯
 一人の御元服。目出度が。なかにも先立つものは涙なり。
 コトバ 天明ければ鏡の宿の遊君どもが申しけるは。さも
 あれ今度吉次殿が始めて伴れたるしよくわんの。見目の
 いくくしきさよ。但ぶつきやうにさうぞ。夜とともに太郎の
 八郎の。多聞の八幡の。あれ御召し候へ。これ御召あれ
 と。獨語をしつる。可笑しさよと申してとりどりにこそ

笑ひけれ。牛若殿は烏帽子ためつけ召され。吉次が前に
 畏つておはします。吉次これを見て。冠者殿は烏帽子を
 召して候や。夫れ烏帽子を着るには。二人の親をとる習
 の候が御身は誰を烏帽子親にめされて候ぞ。さん候餘り
 に人々の。烏帽子召されつれたるが羨しく候ひて。心な
 らずに烏帽子をば着て候へども。仰の如く未だ名をばつ
 かず候。とてもはや天とも地とも父母とも。萬事頼み申
 す上は。如何様にも名をつけて召し仕はれ候へ。吉次聞
 いて。この上は力及ばず。今日よりして御身が名をば京
 藤太とつけうぞや。畏つて候。但御身がやうになまめい
 たる若い人を。徒にて路次を伴れんずることが大事なれ
 ば。吉次が太刀を擔いて奥へ下り候へ。それいなと思は

れば。これよりも都へ上られ候へ。牛若殿聞召し
これを譬に申すかや。世は末世に及ぶといへど。日月は
未だ地に落ちず。天上のからにしきは下つて。でんじや
に交ることなし。何として源氏の嫡々が。浮世を渡
る吉次が太刀をば持たうぞ。あら果敢な心やな吉
次が太刀を持たばこそ。冥土にまします父義朝の御佩刀
を持つにこそと思召し。鬚切の御佩刀をわつそくにかけ。
吉次が太刀を擔いて奥へ下らせ給ひけり。涙の雨は玉
葛昔はかけて見ぬものを。
去る間吉次やうく下りける程に。美濃の國青墓の長者
の館に着く。彼の長者が中のであるには。大名高家の人だ
にもとどまり給はぬに。吉次がとまるいはれは義朝の御

爲めに。一間四面に光堂を建てられし時。金五十兩馬十
疋。勸進に参り入りたる情の深き者なればとて。下り上
りのたびは止り候。青墓の遊君。さつしやう構へ吉次殿
をもてなす。去る間吉次世にあり顔なる風情にて。京藤
太はなきか。こなたへ参り。上藤達の御前にて御酌申せ。
あら痛はしや牛若殿。何時酌とり習ひたること御座なけ
れども。時世に従ふ習とて。をつと應へてめされけるに。
まこととり習はざる御事なれば。銚子の酒を弓手馬手へ
さつくと覆し給ふ。吉次これを見て。大の眼にかどを
立て。不覺の者かな。人の御前の御酌をば。左様にたま
はるが奇怪なり罷り立てと叱る。あら痛はしや牛若殿。
時ならぬ顔に紅葉をさつと散らし。さん候我れ西國方に

て諸山寺にて。衆徒の御出仕の御供申し。柀躑躅闕伽の水。左様の奉公をこそ申し習ひて候へ。武士の御前の御酌は。これがはじめにて候へば。よきやうに教へ召し仕はれ候へ。吉次聞いて。左様の事をも私にてこそ申せ。これは人の御座敷ぞ。ただ罷り立てと叱る。あら痛はしや牛若殿。しほくとして座敷を立たせ給ふ。ここに濱千鳥の局。ちやうへ参りて申しけるは。如何に君聞召せ。今参の京藤太とやらんが吹きげに候ぞなう。世にあり顔に笛をさして候。ちやうこの由を聞召し。和御前は東海道の名折りを申す者かな。藝は主を避けず。泥の中の荷知るを人倫といひ。知らざるをば木竹に譬へたり。如何に吉次が伴れたる。京藤太と申すとも。吹

けばこそ笛をばさすらめ。調子一つ所望せよ。承り候とて。牛若殿の御側に行き君のちやうよりの御所望にて候に御身のささせ給ひたるその笛一手あそばせ。牛若殿聞召し。何この冠者に笛吹けとや。大和竹にめをあけたる。草苜笛にて候を。東の旅の徒然に。さしはさして候へども。吹く迄のことは思ひ寄らずにて候。吉次聞いて何と申すぞ上様よりの御所望は。汝がためには生涯の思出にてはなきか。樵笛にてもあれ。又草苜笛にても候へかしなど調子一つ吹き申さぬぞ。牛若可笑しく思召し。あうこれは一旦の禮まで。さらば一手吹いて。思出に聞かせばやと思召し。母の常盤の淀の津の彌陀次郎が許よりも。買ひ取らせ給ひたる。弘法大師の蟬折なれば。

いくしきとも中々にあう申す許りはなかりけり。この
 笛を取り出し。千五上勺。中六下口とて。八つの歌口に。
 花の露をしめし。とう盤渉に音をとつて雲井にさつと吹
 き上げ。萬事をしづめて遊ばしたり。ちやうこの笛を聞
 召し。面白の笛の音や。唐橋の中將殿は日本一の笛吹。
 富士一見のために。奥へ御下りましませしがこの宿に御
 着あり夜とも笛をあそばせし。音聲息ざし程拍子もの
 あひ清んだるところは。唐橋殿の笛には水際まさつて覺
 えたり。これ程の笛にて。定めて樂は吹くらん。樂一つ
 遊ばせ。源聞召し。とても調子を吹く上。吹かばやと思
 召し一越調に音をかへ。しゆつこんらくを遊ばされ。や
 がて押し返して廻盃樂を遊ばす。ちやうこの由を聞召し。

面白の笛の音やあら面白の樂の名や廻盃樂といふ樂盃を
 廻らす樂。下戸も上戸も押しなべて酒を飲めとの笛の音
 や。然るべくば明日ばかり。吉次殿が止れかし。京藤太
 に笛吹かせ管絃して遊ばん。あら面白の笛や候。所詮自
 一つ飲うで。唯今の笛の殿に思ひざし申さうず。吉次聞
 いて。如何に兄弟内の者近う参つて物を聞け。某が都に
 て申せしことはこれなり。笛は吹かずとも腰にさせ舞は
 舞はずとも常に扇を持って申せしことはこれなり。そも
 あの京藤太が笛を吹かずば。上様の盃などをば何とし
 て賜らうぞ。夫れ一つ賜つて現世の名聞後世の訴にせよ。
 やあ羨しの京藤太やと。盃を羨みしは理とぞ聞えける。
 牛若殿は三度聞召す。御盃を彼方此方へ廻し。夜も更け

ければ濱千鳥の局。盃を納めて皆局々へぞ歸られける。
 ここに濱千鳥の局。御前達をあつめて申しけるは。さも
 あれ晝の京藤太とやらんは。見目も美しい者。笛も上手。
 但可笑しきことを申しつるものかな。夫れ笛の名には漢
 竹胡竹やう竹。青葉二葉。天人のひとへがくし。弘法大
 師の蟬折我が朝の笛には。うらやまと。しま竹より竹な
 んどとこそ申せ。まだこそ聞かね草荳笛とは。所詮昔の
 人は心の至がなうて笛にて草を荳りたればこそ。草荳笛
 とは申しつらめ可笑しきよととりどりにこそ笑ひけれ。
 君のちやう物越に聞召し。和御前達は何を笑ふぞ。さん
 候京藤太が草荳笛と申しつるそれを笑ひ候。扱て和御前
 達は。その草荳笛のいはれを知つて笑ふか知らで笑ふか。

百様を知つたりとも。一様を知らずば争ふこと勿れと。
 申す譬のあるぞとよ。いでく和御前達に。その草荳笛
 のいはれを語つて聞かせん。
 昔我が朝に用明天皇と申せしは十六にならせ給ふまで后
 の宮もましまさず。ある時公卿殿上人集らせ給ひ扇を六
 十六本折らせ。繪女房を描かせ。國々へ廻し。如何なら
 ん賤の女賤の子なりとも。この扇の繪に似たる女房やあ
 る。急ぎ内裏へ参らせよ。一の後に祝ふべしと。日本國
 をぞ觸れられける。夫れ物の美しきをば繪女房とこそ申
 せ。日本廣しと申せども繪に似たる女房は一人もなくし
 て。扇は都へぞ上りける。然りと申せども。筑紫豊後
 の國。内山里と申す所に長者一人あり。四方に四萬の藏

を立てて住めば。萬の長者と申せしを。人の申し易きま
 まにまの殿と申す。子のなきことを悲み。内山里の聖觀
 音に参り。申子をこそ爲給ひけれ。祈誓の驗はやありて。
 御寶殿の内よりも寶珠を賜はると北の御方御覽じて。御
 着帶の身となり。七月の煩。九月の苦。十月半と申すに。
 産の紐平かなり。取り上げ御覽すれば。玉を延べたる如
 くなる姫にておはします。御夢想によそへ。玉よの姫と
 名付け。いつきかしづき給ひけるに。かの姫十四の年。
 この繪扇の下りたるを。引き合せて見てあれば。ものい
 へば扇の繪が嫉むべうに見ゆる。
 去る間内裏へ奏聞申されたり。御門叡聞ましくて。急
 き内裏へ参らせよ。一の後に祝ふべしとやがて勅使をぞ

下されける。長者承り。たとへ宣旨にても候へ。唯一人
 の姫なれば。思ひも寄らぬことなりとて宣旨を背き申す。
 御門叡聞ましくて。惜むところも道理その儀ならばま
 の殿。芥子の種を。日のうちに一萬石参らせよ。それが
 叶はぬものならば。姫を内裏へ参らすべしと重ねて勅使
 下る。長者承り。たとへ如何體の物なりとも。日數を經
 る程ならば。求め参らせんずるが。殊更芥子の種子を。
 日のうちに一萬石何としてかは求むべき。やう女房姫を
 内裏へ参らすべし。長者の女房これを聞き。如何にまの
 殿いたうな騒ぎ給ひそ。御身十八自十四の秋よりも。長
 者の院號蒙つて四方に四萬の藏を立て。内の眷屬なには
 につけ。乏しき事はなけれども。かかる物は時として草

合にもあふやとて。あの乾に當つて。萱の藏を造らせ。年々の芥子の種子を。とり集めて置いたるが。一萬石は。そは知らず十萬石もあらん。長者斜に喜うて。さらば車をかざれとて車の數をかざつて。日のうちに一萬石。内裏へそなへ奉る。御門叡覽まし／＼て所詮唯まの殿は扱て三國一の長者であり。御門叡覽まし／＼てその儀ならばまの殿。蜀紅錦をもつて。兩界の曼陀羅を二十尋に七流織りつけて参らせよ。それが叶はぬものならば。姫を内裏へ参らすべしと重々の勅使立つ。長者承りこは如何に蜀紅錦をもつて。兩界の曼陀羅は佛達の淨土にて蓮の糸をもつて織らせ給ふと承る。人間の身として。何としてかは求むべき。やう女房。王土に住居をす

る身が重ねて宣旨を背き何かせん唯。姫を内裏へ参らすべき。長者の女房これを聞き唯一人の姫なるを。内裏へそなへ申し。玉樓金殿の臺の内に住居をせば。我が子とは思ふとも見んずること難かるべし。夕さりは名残惜しみの管絃とて。夜ととももの管絃なりされども曉は微睡み給ふ。かかりけるところに。内山の聖觀音は長者夫婦が枕上に立ち寄せ給ひ。如何に長者。汝が娘は自に申子なり。惜むところも不憫さに。諸の佛達を集め申し。長者が中のでゐにて。錦を織るぞ聽聞せよ。承つて聽聞する。七夕彦星の織る梭の音は。てい。ほろろ。これほさながら御法なり。二十尋に七流織りつけて。長者殿の中のでゐに置き給ふ。長者斜に喜うて。急ぎ内

裏へ奉る。御門叡覽まし／＼て。所詮唯まの殿は、佛に
てましますや。佛の娘をこひかねて。十善の位をすべる
とも何かは苦かるべき。位を御すべりましまして。十六
の春の比。たどろ／＼と下らせ給ひける程に。十八日と
申すには豊後の國に。聞えたるはや。内山に着き給ふ去
る間御門は。とある小家に立ち寄せ給ひ。一夜の宿を
借り給ふ。宿の太夫御門を見参らせ。あら美しのしよく
わん殿や。御身何處の人ぞ。これは習はぬ旅を浮雲の。
泊定めぬ修行者にて候。太夫聞いて。あらやう／＼しの
返事や。唯すぐに仰せ候へ。さん候都の者にて候。花の
都の人は。何の御用にかかる遠國へ御下り候ぞ。奉公の
望にて。その時太夫横手を打つて。殊勝の冠者殿が奉公

好や。この太夫こそ長者殿が執事なれ。この年になるま
で子といふものを持たず。今日よりして子になり候へ。
田地を耕作せんずるとも。かいせんをせうずるとも。そ
れは御身がままさうよ。御門叡覽ましまして。御覽せら
れ候如く。楊柳の風にふけたる如くにて。田地を耕作せ
んことも。かいせんとやらんも思ひ寄せら。唯奉公なら
ば望にて候。太夫聞いて。この上は力及ばずさらば長者
へ申さんとて長者にかくと申す長者聞召し。急いで具し
て参れ。承ると申して。御門を具足し奉る。長者御覽じ
て。あら美しのしよくわんや。汝は何處の者ぞ。都の者
にて候。名をば何といふぞ。さんろと申し候。長者聞
てさんろとは山の路。人の名には始めて聞いたや。面白

い名や如何にや。山路殿この長者は牛を千疋持ちてあるが。あれなる黄なる牛をば。舎人どもがはつたと悪んで。草をも水をも飼はぬなり。今日よりして山路殿に預け申す。草をも水をもよきに飼うてたび候へ。あら痛はしや御門は。戀ゆる領掌ましくて明れば牛の口を牽き。千人の舎人の舎人と打連れ。後の野邊へ出でさせ給ふ。千人の舎人どもは。苜蓿習ひたる事なれば。てんでに鎌を提げてかきよせ。かきよせ。草を苜蓿る。痛はしや御門は。何時苜蓿習はせ給はねば。牛にうちかかり。笛打吹いてまします。馬は馬頭觀世音。牛は大日如來の化身と承るが。實にやさありけるか人間は。見知り申さねど。畜生なれども色風情を。見知りたるかと覺しくて。草をも食まず。

角を傾け。舌を垂れ御門の笛を聴聞す。千人の舎人ども。この由を聞くよりも。山路殿が吹く物の。名をば何といふやらん。横笛と申しさう。面白いぞや。山路殿。草はし苜蓿るな笛を吹け。汝が牛には草を苜蓿りてかけうぞよう。吹けよ。吹けよといふ程に。一度も草を苜蓿り給はず。これをもちてこそ。夜更けて心清めるをば。山路が草苜蓿夜の笛。若布苜蓿るは田子の浦。若草苜蓿るは武藏野よ。若布若草は和歌の浦。用明天皇の戀ゆる遊ばす笛をこそ草苜蓿笛とは申すなれ。

これは筑紫の物語。さても都には御門を失ひ奉り。公卿殿上人集らせ給ひ。博士を召さるる。博士参りて卜を申す。來うずる八月十五日に。宇佐八幡の御前にて。

御放生會と申す事を執行せ給ふべし。扱て夫れは如何様なる者にさすべきぞ。さん候筑紫豊後の國。内山と申す所に長者一人候。かの者に神事を勤めさするものならば。御門は都へ還御あつて。天下は日出度かるべき由をれいもんを引いて申す。然らば筑紫へ使者を立てよとて。長者の前に櫛を立てる。折節長者は出させ給ひ。これは何と申したる事にて候ぞ。來うずる八月十五日に。宇佐八幡の御前にて。御放生會と申す事を執行はせ給ふべし。扱てそれは何々がいり候ぞ。さん候しきしやうこくしやう神官宮人。八人の八乙女。五人の神樂男参り。ていとこの鼓を打ち。さつ／＼の鈴を振り上げ。競馬あげ馬みこのむら。獅子田樂通つて後流鏑馬候よ。長者聞いて。

あらむつかしげなる事やとて。近里近郷を尋ねけるに。残り皆々揃ひたれども。この流鏑馬とやらんに。はたと事を缺く。その時千人の舍人どもを集めて。もし汝等が中に。流鏑馬をばし知つてあるか。舍人ども承り。上にさへ御存なきに。その上我々は。明暮牛にこそ乗り習ひて候へ。流鏑馬とやらんは思ひも寄らずにて候。長者聞いて。實にくそれはさぞあるらん。あの山路殿は都の者と聞いてあるが。流鏑馬をば知つてあるか。たとへ如何體の者なりとも。流鏑馬を知つて御神事勤むるものならば。正八幡もしろしめせ。是非長者が聲にとらうず。その時御門につこと御笑あつて。流鏑馬やすさうなることにて候。御門には十町に馬場をやり。二町をばのけ馬

場と名づけ、八所に的を立てて遊ばすを、八つ的と名づけてこれは公卿殿上人の技、神の前には三町に馬場をやり、三所に的を立てて遊ばすを、流鏑馬と名づけてこれは武士の技にて、何よりもやすさうなる事にて候、長者は聞いて、扱ては御身はよつく心得て候や、まこと流鏑馬を知つて、御神事勤むるものならば、長者が智に取つて、四方に四萬の藏、數多の寶を添へて得させうぞと、堅く約束し給へり。

かくて八月十五日になれば、近里近郷の大名高家、宇佐八幡の御前に棧敷をうち埒を結び、各見物し給ふ、長者夫婦も同じく、棧敷をうつて見物す、去る間しきしやうこくしやう神官宮人、八人の八乙女、五人の神樂男参り。

ていとうの鼓をうち、さつくの鈴を振り上げ、競馬あげ馬みこのむら、獅子田樂通つて後はや流鏑馬になる、扱ても御門には色よき衣装束を奉り、鹿毛なる馬に貝鞍置かせ、御前にひつ立つる、御門斜に思召し、引き寄せゆらりと召され、馬場渡し取つて返し、一の的ちやうと遊ばし、二の的はたと遊ばす、三の的に此度、ひらいてかからせ給ひけるに、神殿俄に震動して、白き水干立烏帽子、金の笏を御持あり、忝も八幡は、搖ぎ出でさせ給ひて、白洲に畏り、如何なる御事候ぞ、王は十善神は九善九善の神の神事を、十善の御身として、勤めさせ給へば、愈五衰重なりさう今は御門へ還御あれ、還御ならぬものならば、末世の衆生を罰せうずるで候、人多き

その中に長者夫婦は、棧敷よりこぼれ落ちさせ給ひて。如何なる御事ぞ。十善の御身を三年が間、使ひ申す事ども。口惜しさよと申し。流涕焦れたりければ御門叡覽ましく。よしよし苦しかるまじ。汝が娘を戀ふるゆゑに。いや三年は奉公ありつるぞ。今は姫を参らせよ承ると申して。忝も宇佐八幡の。介錯人にて玉よの姫十六用明天皇。十八と申すに。御門へ還御あり。玉樓金殿の臺の内に住居しいや鴛鴦比翼の語らひ淺からずこそ聞えけれ。その後御子を。設けさせ給ひて。聖徳太子と申す。我が朝に佛法を。弘めさせ給ふなり玉よの姫は聖觀音。用明天皇は阿彌陀如來の化身。聖徳太子くせ觀音の化現なり。用明天皇戀ゆる遊ばす笛をこそ。草苜笛と申すなれ知ら

ぬ事をば和御前達笑はぬ事であるぞとよ。以前に笛吹いたる京藤太とやらんは。思へば見るところのあるに此方へ具して参れ。承ると申して。牛若殿を具足し申す。去る間牛若殿。座敷に直らせ給ふ。ちやうこの由を御覽じてあう不思議の冠者殿や。座敷に直る風情は野間の内海にて失せ給ひし義朝に違はず。御目の内は偏に悪源太にて御座候。もの宣ふ聲の色は朝長に違はず若しも源氏の由縁にてましまさばはやく名乗り給へとよ。源聞召しこれは上臈の子にても候はず。都三條邊に住居する下臈の子にて候。ちやうこの由を聞召しなう御内は何をのたまふぞ。自は義朝の妻女なり。萬

壽の姫と申して忘形見の御座候を。いらたか寺の麓に出
 家になし置き申すなり。扱てこのあなたに一間四面に光
 堂をたて。阿彌陀の三尊を安置申し。義朝悪源太朝長父
 子三人御影を現はし申すなり。若しも源氏の由縁かかり
 てましまさば。焼香など。あれかしなうあら心深の冠
 者殿や。源聞召し。軒の玉水ちりく草。包めども包ま
 れず。扱て隠せども隠されず。父よといへる聲を聞き。
 やまぶき顔に打匂ひ。今は何をか包むべき。義朝に
 は八男常盤腹には三男。鞍馬の寺に住居せし牛若と申す
 者なり。ちやうこの由を聞召し。扱ては鞍馬におはせし。
 牛若子にて御座ありけり。若君見申せば。死して久しく
 なり給ふ。義朝の御姿を。見参らする心地のありて懐し

さよとのたまへば。源も二歳の年。別れ申せし父御をば。
 夢とも更に辨へず唯今か様に仰せらるれば。冥土にまし
 ます父御前を。拜み申す心地のありて懐しさよとのたま
 ひて。御袂に縫りつき。ふし沈みてぞ泣き給ふ。互に盡
 きぬ。その涙よその袂も濡れぬべし。
 コトバ その後君のちやう濱千鳥を召され。あれく具足し
 申し御影拜ませ申せ。承ると申して。牛若殿を具足し申
 す。立ち入り御覽ありければ。實にも義朝悪源太朝長
 父子三人の御影を現はし申す。源斜に思召し。焼香禮を
 参らせ。不思議に牛若こそ思ひ立つて。吉次が太刀を擔
 いて奥へ下り候へ。かへすも道の間の守護となり給
 へと。深く祈誓を申す。習はぬ旅の疲。禮盤引き寄せ

枕と定め。少し微睡み給ひけり。
 枕上コトバに立ち寄らせ給ひ。嬉しくも幼心に思ひ立つて吉次が太刀を擔いて奥へ下るものかな。構へて吉次吉内吉六兄弟三人が巾さんことを。我々父子三人のいふ事と思ひ。西を東北を南とも背くべからず。吉次が太刀を擔いて奥へ下り候へ。そよ忘れたり日本國の盗人ともが。吉次が皮籠に目をかけ。青野が原によりきし。夕去の八つの比は寄せうぞ。用心よきに仕れ。父子三人の者も。草の蔭にて鐵の楯となるべきなり。かくてもあらまほしけれども。修羅が始まるに。暇申して牛若とて。立ち歸らんとし給ふ時。源夢心に。あら御情無や。なう暫くと仰あつ

て。御鎧の袖に縋ると思召し。兩眼覺めて御覽ずれば。御影の袖に。取り附き申す。フシ同音さては夢にてありけるぞ。あへなの今の。對面やとて流涕焦れ給ひけり。コトバさりながら慥に御夢想ありけるものと思召し。もとソキの所に御歸あり。萌黄匂の御腹巻を。草摺長にざつくと召し。上帶結つてちやうと締めこんねんどうの御腰の物を。一文字に御さしあり。かうがいぬきて枕と定め。鬚切の御佩刀を腹の上にとりと置き。弓手の足をさし延べ。馬手の足をきつと立て弓手の御目のまどろむ時は。馬手の眼が天井をはつたと瞰んで殿居をしてこそ臥されけれ。大夫扱ても青野が原に。よりき仕る盗人どもは誰々ぞ。先づ一番に越後と信濃の境なる。熊坂長範親子六人。坐

する。善光寺なる。南大門のるばらかひの右馬丞。五町の與次さいぐちの七郎。はつ田の刑部。かいつかみの鷲次郎。まどをのぞくは空盲。脊に塗つたる生あぜを。曉走る螻蛄次郎。でんがくが窪には。友を迷はす狐三郎。同じく。次郎。伊豆の御山にはやげ下の小六。ふじに坂東次板東六このものどもを先として。大將七十餘人。その外都合小盗人三百人に過ぎざりけり。大幕三重にひかせ大筒大瓶かき据ゑ。我等が寶を飲まばこそ。吉次が皮籠を飲むなるに。飲めや唄へやざめけとて舞うつ唄うつ酒盛をする。

ロキ
面々は何と定むる方にもなうして酒を參るぞ。いづく長

範が。盗みしはじめし由來を語つて聽かせ申さん。某が親にてさうし人は越後と信濃の境なる。熊坂といふ所に唯佛のやうなるまたうとなり。某は如何なる佛神の計ぞや。七歳の年。長野郷といふ所にて。伯父の馬を盗み取つて。ならば飯田の市にて賣つたるに。ちつとも仔細が候はず。それよりも盗は。資本も入らぬ。よき事と思ひ定め。日本國を走り廻つて盗をするに。一度も不覺をかかず。かくて長範は。子を五人持つて候が。何れもよい能を持つて候。太郎は晝強盗が上手。次郎は夜討が上手。三郎は忍が上手。四郎は馬をよく盗みさう。五郎は人をかどへ取つて。あの佐渡が島へ賣りさうもの。彼奴原は一期過ぎうずる能を皆持つて候。七歳の年よりも。不覺

をかかぬ長範が今夜胸こそ騒ぎ候へ。天晴三百七十餘人が中に。才覺廻つたる人やましますらん。吉次が宿へ打越え。内のけごをそと見て御戻り候へかし。

人多きその中に。伊豆の御山のやげ下の小六。某見て參らんといふ儘に。柿の篠懸鹿間の頭巾。まへわづかに引つ冠うで。青墓の君のちやうの門外に寄つて大音揚げて呼ばはる。熊野山の山伏。佛法修行のそのために。奥松島へ下るなり。山伏は十人に餘つてさうぞ。今夜一夜の陪堂たべやつと呼ははつて。内のけごを靜に見て通る。稍遙に候ひて。内よりも米の俵を投げ出す。

小六急度見て物への門出に。繩かかりたる物は忌々しと存ずれば腰の刀をひん抜いて。掛繩はらりと切つて棄

て。米を少し取り。青野が原に走り歸つて。中の座敷にどうと居て二の息をほつとつく。長範これを見て。扱て如何にやげ下殿。小六聞いて得物はいくらもさう物。八十四の皮籠を。切戸の脇に積んだるは只寶の山の如し。四十二疋の雜駄。三疋の乗馬。何れもよい馬にて候。三十餘人の兵士の者。弓胡録太刀刀をつとり添へ。用心する顔には見えて候へども。胴突を當つるものならば。彼奴原は椽の下へ隠れうす馬も皮籠もやすくと取らうずが。爰に大事の事が候。今に始めてやげ下殿の。大事とは何事ぞ。小六聞いて。いや語らせて聞召されよ。古は伴れても下らぬ。十六七のしよくわんが候。このわつばが衣裳の體をあらく語つて聞かせ申さん。先づそ

つと見たる所は、色白く尋常なるが、肌には鈍金をひつ
違へて着て候。着たる直垂は、唐絹をもつて、地をば山
鳩色に空色に一はけはいて、十八五色の糸をもつて、物
の上手が縫物を縫ひて候。先づ弓手の紐付に、齋垣鳥居
社壇を縫ひ、馬手の紐付には、たけくらべに杉を三本縫
うて、源氏の氏神白鳩が、十二の飼子を飼ひつれ。羽節
と羽節をくひ違へ、ばつと立つてはさつとは下り、舞ひ
遊んだるいはひの様をありくと縫うて候。後の菊綴
には、北山殿のさんざう、住吉のすゐびん、御室の御所
のけいきをありくと縫うて候。扱て又袴を下りに、し
ぐせいぐわんを學んで、唐土の猿も千疋、日本の猿も千
疋、唐土の猿は大國なればせいを大きく、面を白く縫う

て候。日本の猿は小國なれば、せいを小さく面を赤く縫
うて候。日本と唐の潮境のちくら沖といふ所にて、唐土
の猿は日本へ越さんとする日本の猿は唐土へ越さんとし
る。越さう越さじの。がまのさうの所をば、あうありあ
りと縫うてさう。扱て又袴の蹴廻に、岩に松鶴に龜、堰
にかかる川柳。沖の浪がとうと打つてさつと引いて行く。
潮境を縫うてさう。着たる腹巻は、これは萌黄緞なり、
世の常の腹巻は草摺を八枚下ぐるが、この草摺は十二枚
十二枚の草摺に、白金黄金をもつて、薬師の十二神をい
がくとあらはず。さいたる刀は皆黄金造なり。とつつ
け鞆口に、俱梨迦羅不動明王あう灌壺へ飛んで下り、劔
をのうたる所を、ありくと彫つてさう。表の目貫は不

動の體。裏の目貫は鞍馬の大悲多聞の。御神體をあらはす。下緒には法華經の七の卷。薬王品を。三ながれ組んで候。持つたる太刀は。二尺六寸か。七寸かと覺えたり。切羽股よせ。うんどつかぶとがね。眞の目貫そら目貫。せめしばひき石突かはさきに至るまで。上品の黄金にてひらめき立つて見えてさう。着たる烏帽子は。六波羅様の當世むきの。つぶのちつと荒らかなるを。一くせみくせませ。雛形にあひをあらせ。櫛形をいがくと。一だめためて。左へ折つた烏帽子なり。鬢の髪は縮んだり。眉の毛は苧つたり昨日か今日の山出。このわつばが有様を物によく。譬ふれば。木ならば朱檀。鳥ならば鳳凰。金ならば沙金。昔をとるならば源氏の大將當世様をとる

ならば。清盛宗盛の御公達でましますが繼母のなかに悪まれ。東と聞いて。吉次を頼んで奥へ下ると覺えたり。このわつばが目のうちをたんだ一目見てさうが。油断するものならば。三百七十餘人の。盗人の細首は助かり難く見えてさう。候。長範暫く打聞いて。やげ下殿の物語こそ。さらく氣も散んぜぬ事にて候へさりながらそのわつばが。何ともはやれかし。例の長範が。八尺五寸の棒を持つて。ゆりひらいて唯一打の勝負さう。夜は何時ぞ。はや八つの比になつて候。時こそよけれ人々はや打立てといふ儘にてんでに松明ともしつれ。青墓の君のちやうの門外へのめきたつて寄する。

去る間熊坂の太郎。胴突を取つて。とうくと當つる。源聞召し。あは夜盗よと思召し。わざと表の部を。二三間取つて椽より下へ投げ落し。上なる部を下ろしかけ。寄する盗人を今や遅しと待ち給ふ。去る間太郎は黒皮の胴丸着。髪をばつと亂り。大長刀を引きずつて。人はないぞ唯参れやあ参れや参れと下知をする。源は御覽じて。彼奴は曲物。斬らばやと思召し。走りかかつて。いかづち切と名づけて。いやちやうと切つて御覽ずれば。無慚やな太郎。敢なく首を打落され。首は内へ轉びければ。胴は外へぞ倒れける。熊坂の次郎が急ぎ走り歸つて。如何になう長範。太郎こそ手負うてませ。長範聞いて。やあ痛手か薄手か。次郎承つて痛手やらん薄手やら

ん首が失せてさうばこそ。長範この由聞くよりも。無念の次第かな。そのわつばに手並見せんといふままに。八尺五寸の。さても棒をば水車に廻いて源に渡り合ふ。源は御覽じて。長範が棒をば一尺おいてつんと切り。二尺おいてちやうと切つて手元許り残されたり。三百七十餘人の盗人。この由見るよりも源を中にとりこめて。火水になれと揉うだりけり。源は御覽じて。やあ玉に慣れたる蓬萊の鳥の風情もかくやらん。驚く気色はましまさず。打物の束をば。莖長に取り延べ大勢の中へ割つて入り。散々に切つて廻る。天は渦巻いて地は朱に染めかへ。龍が水を得雲を分け。虚空へ上る如くなり。未だ時を移さぬ間に。屈竟の盗人どもを八十三人切り伏せたり。長範

これを見て六尺三寸の扱ても長刀。水車に廻いて。源に
わたり合ふ。源御覽じて多くの敵にわたり合ひ。骨を折
つたり。實にや長範は新手の武者なり。大長刀にてたた
き立てられて。受太刀になつていやきつくと引き給ふ
長範これを見。あはよいぞと思ひて。隙間なく打つてか
かりけり。源御覽じて。僧正がかげにて習ひし扱ても。
天狗の法は出合ふ所と思召し。霧の法を結んで。敵の方
へ投げかけ。小鷹の法を結んで我が身にさつと打ちかけ
ちやうど切つて御覽すれば。無慚やな熊坂が。眞甲二つ
に打ち割られ。朝の露と消えにけり。それよりも源。奥
へ下らせ給ひて。天下を治め給ひけり。

富樫

去る間判官殿。都を御立ましくて。急がせ給ひける程
に。加賀の國安宅の松に程なく着かせ給ふ。判官松を御
覽じて。あら優長なる姿かな。四國西國都にて。その數
松は見てあれど。か程の松は未だ見ず。名の無き事はよ
もあらず。尋ねて参れ武藏。辨慶承り。松の邊を見てあ
れば。童が四五人松の葉寄せてぞ居たりける。武藏する
すると寄つて。いかに童。この國にてこの松をば何の松
とかいふぞ。こざかしき童が進み出でて申す。さん候當
國は坂を隔てて此方。草深き遠國にて。か程の松に名付
人も候はず。さりながら。在五中將の歌には安宅の松と

も詠まれて候。そのみならず鳥羽院の御内なる。佐藤
兵衛憲清は。うはの空なる戀をして北國修行に出づると
て。西行とかれは名乗る。かの西行の歌には。フシ下ヨリ根
上りの松と詠まれたりなう山伏と。申しけり。コトバ判官
聞召されて。物聞き給へ方々。勸學院の雀は蒙求を囀り。
智者の邊の童は。習はぬ經を讀むと。能うこそこれは傳
へたれ。ござかしき童に引出物取らせ。平泉への順道を
委しく問へとの御諚なり。承ると申して。辨慶が笈より
も色よき扇を取り出し。童に取らせ。平泉への順道を委
しく尋ね問ふ時。童聞いて。さん候これより奥へは。上
道下道中道とて三つの道の候。まづ下道の難所を。語ら
ば聞召されよ。くろべ四十八ヶ瀬。親知らず子知らず。

いちふりしやうとうたのわき。二三のはざま最上川。
カカル あねはの松。かめわり坂と申しつつ。四十二所の
名譽のこれが難所なり。少人もおはしますがいかでか下
り。給ふべきさて上道の難所は。都の春は過ぎ行けど。
越路の雪は未だ消えず。去年の雪の叢消えに。今年の雪
の降り積り。谷の下水落ち合ひて水嵩まさりて。鳥なら
で通ふべきやう更になし。中道と申すは。上道も順
道にて。人の心も慈悲なれども。爰に一つの難儀あり。
鎌倉殿よりも。觸状が下つて。この國の戸極殿。城塚を
構へて。山伏の禁制強くして。一昨日の暮程に。九人通
る山伏を。判官殿の御伴とて。押さへて斬つて懸けられ
たり。昨日の早朝に。六人通る山伏を。五位殿の御伴と

て。これをも斬つて懸けらる。昨夜も五人斬らるる今
朝も三人斬られてさう。か程なる難所を。いやたしやう
こうはふるとも。争でか下り。給ふべきなう山伏と。
申しけり。判官聞召されて。扱ては某一人の故に因
つて。行方も知らぬ山伏達の。左様に多く亡びさせ給ひ
つらん。吊はばやと思召し。松原に入つて見給へば。去
年の冬の比よりも。二月下旬まで。斬り懸けたる事なれ
ば。百許り程蔭に懸かる。その中に辨慶一人。識法をば
讀まずして此處彼所を奔りめぐつて首を見。五人の童を
はつたと睨んで。この國の戸極は何も知らぬと云ふ。童
聞いてこの國の戸極殿の。物知ろし召されぬいはれはさ
う。いでく。戸極が物知らぬいはれを語つて聞かせん。

亂行不淨の大俗の首を上懸け。ひんはつとまろめ。解
脱幢相の。種々の法衣を身にまとひ。法界道場にして。
彌勒の出世に生を爲さうず。首を遙の下に懸けたるは
扱てものをば知らいで懸けぬ。首を遙の下に懸けたるは
ひ。横手を丁と合せて。わかれたり山伏。それを咎め給
ふか。上に懸かつた俗の首に數多の異名付けられたり。
向ふ齒反つて猿眼に。小鬢の髪縮んで。色の白き
をば鎌倉殿の御舍弟に。源九郎義經の。御首と號して。
遙の上に懸けられたり。下に懸かつた首にも。數多の異
名付けられたり。かう申してあればとて腹ばし立たせ給
ふなよ。御身の如くに。飽く迄せいは高うて。極めて色
は黒くして。眼に憎しみを持つたるが。物言うたる聲つ

きの。きことなき山伏をば。判官殿の御内なる。膝許去
 らずの西塔の。辨慶と號して。遙の下に懸けられたるぞ。
 山伏と云ひければ。いやさしも剛なる武藏坊が我が身の
 上と聞きなして。膝震うて立つたりけり。武藏心に
 思ひけるは。扱てはこの國の戸極は。某が面をばよくは
 見知らざりけるや。その儀にてあるならば。某一人立ち
 越え。城の體を見ばやと思ひ。君の御前に畏まり。某一
 人うち越え。戸極が城の有様を見て參らんと申す。判官
 聞召されて。心變りか武藏。心變りに及ぶならば。都の
 士とは爲さずして。北國の道芝となさん事こそ口惜しけ
 れ。辨慶承り。こは御詮とも存じ候はず。斯程山伏禁制
 の所を十三人が喚いて通り。恠められては如何に陳ずる

とも叶ふまじ。まづ某一人立ち越え。城の體を見んずる
 に。見おほするものならば。山伏の法にてある間。悦の
 螺を二つ三つ吹かうず。又見損ずる物ならば。最期の螺
 を只一つ吹くべきなり。螺ばし一つ立つならば。ハハ引
 すはや武藏めが。最期ぞと思召し。北方の。三味堂にて
 清き自害おはしませ。暇申してさらばとて。立離れんと
 あたりしが。思へばこれが最期なり傍輩の。人々に名残
 や惜しく思ひけん。龜井片岡伊勢駿河。間近きさまに近
 付けて。如何に方々武藏め一人戸極が館に移りて。城の
 けこを見損じたらば。辨慶が腹切らうず。君御腹を召さ
 れなば。死出の山にて待ち申さん。あう方々。先に
 も腹を切るならば。三途の川にて待ち給へ。暇申

舞の本 富樫

して。さらばとて名残り惜げに。立ち出づる。去る
間辨慶は。飛驒の工匠がうつ墨繩にはあらねども。只一
筋に思ひ断り。さしも待ち懸くる。戸櫓が城へ入つたる
は人に變つて覺えたり。山伏の法にてある間。れいじ識
法をこそ誦むべきに。武藏何とか思ひけん。高念佛を申
し。上土門よりつと入つて。内の體をば見たりければ。
戸櫓が城の有様待つ程に拵へたり。先表の櫓十三所。脇
の櫓九所。二重三重に高櫓を上げさせ。東表を見てあれ
ば鞍置馬四五十牽つ立てて置いたりけり。西の遠侍を
見てあれば。戸櫓が若黨百人許り並び居て。藝目くつた
り矢矧いだり。碁將碁雙六に心入れたる所もあり。着座
を見てあれば。四十許りなる男の。平文の直垂に烏帽子

のさしきを。たぶくと上げさせ。ふんたうに懸かつて。
若侍に雙六うたせ。助言して居たりけるは。是れぞこ
の國のあう戸櫓の介と覺えてあり。あら口惜しや時こそ
あれ日こそあれ戸櫓が出でたる所へ。某來つたるは詰め
たる業と覺えたり。忍ばばやと思ひしが。見えたる事も
なき先に。敵にけこを見知られて。悪しかりなんと存ず
れば。大の聲音を差し上げて。熊野山の山伏が佛法修行
の。その爲に。出羽の羽黒へ通りさうぞ齋料賜べと乞う
たりけり。戸櫓これを聞き。持つたる扇にて疊表を。丁
と打つていやあれを見よ人々。愚人夏の蟲。飛んで火に
入ると能うこそ是れは傳へたれ。心を盡して待ち懸くる。
西塔の辨慶こそ。唯今來つたれ。打て張れ搦めよ。いや

指繩なんとと犇いた。固よりも武藏。我が身の上とは知つたれども。聞かぬ體にもてなして。大木枯木の花眺め空嘯いて立つたりけり。時剋も遷さず戸樞が若黨百人許り眞黒に甲ひ。武藏を眞中に取り込む。武藏逸雄の若者どもに。犇と討ち止められては。悪しかりなんと思ひ。戸樞が居たりし椽の端へするくと寄つて。篠懸の袂ひき繕ひ。大の眼に角を立て。戸樞をはつたと瞰んで。如何なる野心ちやうきやうの者を召し置かれ候て。唯今参つたる法師までも。憂目を見んづるやらんと存じて候に。よく承つて候へば。この法師が身の上と。聞きなして候は虚事さうか戸樞殿。戸樞聞いて。扱ては汝は。判官殿の御内なる。膝許去らずの西塔の辨慶にて

はなきか。ゑとここにさう。山伏の名は。世の例多しと申せども。判官坊膝許去らずと云ふ山伏の名は今こそ聞いて候へ。左様に才覺廻つて。辨舌の明かなるが辨慶にてはなきか。あう才覺廻つて辨舌の明かなるが辨慶ならば。左宣ふ戸樞殿の。才覺廻つて。辨舌の明かにましますは。扱て御身も辨慶か。戸樞聞いて。何とも陳ぜよ只辨慶といふ。武藏餘りに陳じ兼ね。但しかう申す法師が額に。辨慶といふ字ばし据つて候か。字の据つたると同じ事鎌倉殿よりの。繪圖のある上疑あらじと云ふ。よもあらじたばかり事ぞと心得。あせうのあらば見んと乞うた。あら無慙の辨慶が。幾程命長らへんとて。繪圖を乞うつる優しさよそれ取り出して見せよ。承ると申して。若侍

が座敷を立ち。八尺屏風を取り出し。武蔵が前に颯と立て。繪圖をさらりと打ち懸けて辨慶に見する。武蔵が丈は、しも寫いたり書きも畫いたる繪師かな。武蔵が丈は、六尺。二分。繪圖も六尺二分なり。色黒く丈高く。眼の悪しを寫いてあり。剩へは武蔵殿。左の眼先に痣のあるまで。寫いたは遁れつべうは。なかりけり。武蔵今は言葉を変へて陳ずる所と思ひ。如何に戸樞殿。以前にこの法師。熊野山伏と申せしは。御身の心地少し引き見んため。是れこそ南都東大寺の。勸進聖さうよ。戸樞聞いて尊うさう。寔に南都の勸進にてましまさば。勸進帳はおはすらん拜まんと乞はれたり。あら無慙や辨慶。南都の勸進とは述べたれども勸進帳はあらばこそ。

持たぬと云はば杖打に打ち覆せられうず。持つたと云はばあらばこそ。是非を武蔵。辨へ兼ねて立つたりしが。いやく持つたと云はばやと思ひ。愚なり戸樞殿。三國一の大伽藍の。勸進をせうする聖が。勸進帳持たては如何候ふべき。是非見參に參らんと云ふままに。笈をひつたと下し。絡げ繩ふるくとほとき。上段に手を入れて。からりくと探しけれども。都にて入れざる事なれば笈には更になかりけり。武蔵餘りの口惜しさに。目を塞ぎ。南無や八幡大菩薩。源氏の氏子をば。百王百代。守らんと御誓と承りて候ぞや。一の瑞現を。見せしめ給へとからりくと探さるる。實にや八幡大菩薩の。與へ賜ひけるか。自然の往來の。卷物一卷候ひけ

る。おつ取つて指し上げて。勸進帳は。これにあり拜み
給へと。見せにけり。戸極是を見て。尊うさう。こ
れへたび候へ拜まんと請はれたり。眞の勸進帳にてあら
んずるには。如何に戸極が拜まじと云ふとも。押へて拜
ませんするが是れは自然の往來なり。一字なりともこれ
はといはれ。悪しかりなんと存ずれば。愚なり戸極殿。
忝なくも十善帝王だにも。冠の巾子を傾け。拜ませ給ふ
勸進帳を。申さんや御身は。大俗の身として。手に取る
程ならば。五體竦んで立ち所危しと嚇す。戸極武藏に
嚇され。さらばそれにて遊ばせ。是れにて聽聞申すべし。
武藏この勸進帳を讀みおほせん事は不定。讀み損ぜん事
は治定。讀み損ずるものならば。人手には懸るまじ。あ

れに衝いて立つたる。白柄の長刀引ん奪うて。飛んで懸
らんずる若者共を。一々に追つ拂ひ。あれに牽いて立つ
たる葦毛なる駒の。蹄堅さうで如何に駆け足の疾かるら
ん。引ん奪うて打ち乗り。三味堂に参り。下君にこの由
申し。一の刀にて。ごんぜんがいし奉り武藏め腹を切ら
うず。君御腹召されなば。十一人の人々も皆腹を切らう
ず。生きては功をなさずとも。死んで功をなすべきな
り。日比我が君。七生迄と契り置かせ給ひたる。愛宕
の太郎坊。下比良の山の。次郎坊。山々の小天狗天のや
いじん。はつしやうじん。牛頭馬頭阿防羅刹。異形異類
の鬼共を。引き具し候ひて。本望なれば關東へ。刹那が
間に亂れ入つて。箱根山の嶺より。黒雲をたなびき電光

を飛ばせ。玉を琢く鎌倉に。車軸の雨を降らし。谷七郷
 を洗ひ流し憎かりし梶原を。左右なくも殺さずして。百
 鬼神に仰せ付け熱鐵の湯を沸かし。口の内へ流し入れ。
 六腑五臓を焼き拂ひ七代子孫を取り殺して。木望を遂ぐ
 るならば菅相丞にてあらずと。荒人神と武藏めが。
 仰がれん下ずる事どもは案の内と思ひければちつとも騷
 く事はなし。武藏この勸進帳を。高く持つて讀むな
 らば。後なる人々に讀まれうず。又低く持ちて讀むなら
 ば。紙が薄くて字が透り。前なる戸櫓に一字なりともそ
 れはといはれ。悪しかりなんと存ずれば。六尺二分の辨
 慶が。七尺優に伸び上り。しううちての笠を。頭甲にき
 つと着なして。字ならば二行三行。そつと開いて。

さうかんに押し當てて。何とは。知らねども。敬つて申
 すと上げたりけり。敬つて申す。勸進の沙門こら
 くだむのちしきのしやうに曰く。和州山科の里東大寺
 の。勸進の事ことに十方旦那の助成を蒙らんと欲す。
 右の旨趣如何といふに。かの伽藍の濫觴は。聖武天皇の
 后光明皇后と申すは。大職冠の。御娘生身の觀音な
 り。然るに。有漏の生涯は歩を他界に懸くる釋尊亦雙林
 の煙と昇り給ふ然るに御門后の御別れたへにして。雲上
 に曇あれば月卿光を失へりかれ追善の爲に。一寺の伽藍
 を建立し給ふ。今の。大佛殿これなり。御堂の高さは。
 二十丈本尊の御丈。十六丈遠く異朝を。尋ぬるに大唐四
 十八箇の大伽藍に勝れ。天竺。祇園精舎にも。超えま

して。我が朝に並びなされ莊嚴。七寶を鏤めくわう
やうらんけいを琢き。御堂の内に珠玉を飾り。瑠璃の壁
碑礫の垂木瑪瑙の桁。玻璃の柱本尊は金銅盧遮那佛。
並びに四天は黄金を展べ。十一丈の瓔珞。虚空無何の。
風に亂り。花せうアッル。ゑんの。玉の旌かかる無雙の。大伽
藍に雷火降つて火失す破滅の時に相差はず。爰に深草
の御門のぎやうざう越の君に合力し。悉く琢き給ふこれ
はこれ。王法の繁昌なり。王法の繁昌は。天下の吉慶
たり目出度かりける折節に東大寺興福寺。兩寺の間に衆
徒喧嘩を出し互に破滅の。火を放す眞に魔閻の。所爲を
なし煙庭に。飛んで落ち雷火雲を走れば佛像。跡を削り。
五時の函焼け八教の軸も灰となす。爰ににやたいの御門

のぎやうざう勸進の力を勵ますとはいへどもさん
いさくわんもはんさくなり。目出度かりける折節に爰
に平家の大相國惡逆の下知に。随つて本散位の中將重衡
左衛門ともたか民部重吉都合その勢三千餘騎。治承四
年十二月二十八日に。南都へ馳せ向ふ。南都の衆徒
防ぎ戦ふといへども法末世に盡き。忝くも二階の總門て
かいの門に放火をせしむ。かれ猛火。みちくして堂
塔僧坊神社佛神の嫌なく一塵も残らず。焼き下拂ひ畢ん
ぬ。煙。有頂。天に上り。雲となつて争ひ下ければ十六
丈の。盧遮那佛。御頭落ちて塚の如し。御身は湧いて山
の下。如し。こんじん世界の。しやうごんを寫し奉る東金
堂。西金堂。下刹那が内に。焼き拂ひ畢んぬ悲しきかなや

恩愛別離の生死の輩あれを見これを見るに何時をか。期すべきぞ。御眼鹿となつて。春日山へ飛び入り。給ふ。比丘も比丘尼道俗男女の。嫌なく大佛殿の名残を悲しみ炎の中へ飛び入り。飛び入り焼け死するものは。数知らず阿難附續の靈地の今朝灰燼となつて。地に踏まるるきやうご滅び荆棘あり姑蘇臺の露。瀼々たり偶残り止まる。物。下しやう兄弟の門に立ち寄り暫はねを休むる爰に。志ゆせう坊聖せんせい坊。春日大明神の御示現を被つて。勸進帳を額にあて。おほそれ。おそれ。法皇の御方へ訴訟を。上げらるる法皇こんまつを運ばせ。給ひ。肥後肥前筑後筑前豊後日向大隅薩摩九國を。寄せらるる。女院の御方より。伊豫讃岐阿波

土佐四國を寄せられたり。四國九國より。鍛冶千人番匠千人。杣千人。三千人。春日山へ。分け入つて材木を採つて淀木津河へ降す事。はげ敷し彼の大物。小物を如何にとして。地形の表へ引き着くべきと歎き。悲む。渴仰の涙肝に銘し。三寶のめぐみに寄り。大國より。智者の牛が来て。一日一夜に。引き着けて牛大國へ歸りけり。日本悦うて。地形の表。御堂の高さ二十丈。本尊の御丈十六丈。かうは八ちやう多聞持國增長廣目。百餘せんのはいへとも御堂の供養佛の供養鐘の供養三供養を未だ遂げず。この供養を。のべんため。六十。六人の。扱ても小聖。六十六箇國へ各廻つていや勸むる所の勸

進なり。一紙半錢に入つたらんずる輩は。今生にては安
 穩快樂の。徳を被り。來世にては。弘誓の舟に竿をさし
 千葉の蓮華に。戯れんず事は疑ある。アタル。べからず南無歸
 命けいと讀み上げて。くるくくと引ん卷いて。もとの笈
 へ。アタル。投げ入れたる。武藏坊が。アタル。有様。人間の業でな
 かりけり。

笈さがし

去る間武藏坊辨慶は。富樫が館にて勸進帳奉伽帳を。悉
 く讀み上げければ。富樫よくく。聽聞あつて。あら殊勝
 や。誠に南都の勸にて御座有りけるを。存じ申さで一時
 なれども白砂に立て申しつる事。左こそ佛神三寶にも憎
 しと思召されつらん。こなたへ御入り候へとて辨慶を請
 ぜらる。武藏安堵の思をなして。今は笈を此處に置かば
 やと思ふが。いやく痴れたる者に笈探され。悪しかり
 なんと存ずれば。笈懸けながら座敷に無圖と直る。富樫
 御覽じて。小勸進にて候へどもとて。卷絹三十疋武藏が
 前に積ませらるる。富樫の北の方を始め。その外心さし

の人々は。武藏殿が前に寶の山を積む。辨慶これを見て、ああら夥しの御奉伽共候や。只今は賜はり度くは候へとも。存ずる仔細の候。來うずる三月に。これよりも都へ着けて賜べと申す。富樫聞いて。京は何條と問はる。武藏何時もいひつけたれば。都三條河原さきの。辨慶が許へ着けて賜べといはんすと志して。あう都は三條河原さきの。辨といつしがあつと思ひて。辨そうの御坊へ着けて賜べとぞ述べにける。さらば御暇申すとて互に暇乞ひ乞はれ。富樫が館をぞ出でにける。三まん堂に参りて。君に斯くと申しければ。武藏殿にてなかりけり。只八幡の御現化とて御手を合はせ給ひけり。その夜は宮の越さらだけの大明神に一夜の通夜を申し。

夜を込めて出でさせ給ふ宮人申しける様は。これより越中への御下向はなかく叶ひ候まじい。それを如何にと申すに。俱利迦羅の峠を。砥波の七郎が七百餘騎にて支へ。山伏を通し申さず。能登と加賀との境をば。しほの小太郎が防ぎ山伏を通し申さず。越中への御下向は思ひも寄らずと申す。辨慶濱に下り。若し能登の方へ下る舟もや有るとぞ問うたりける。折節すすの岬へ下る舟こそ候ひけれ。天の興ふる處とて。この舟に便船し。その日内に能登の國すすの岬に着かせ給ふ。御舟よりも上らせ給ひ汀の岩に腰を掛けて邊の體を見給ふに。石巖峨々と聳え。風縮んだる萬木は繪に畫いたるが如くなり。西の沖は果てしもなく蒼海雲を浸し櫓權をわたる越舟や。波

間にかづき浮き沈む。水にはぶれて飛ぶ鷗汀の岩に。波懸けて底荒磯の岩間にも。砕けて見ゆるうつせ貝。人の心は荒磯の。片思ひなる鮑貝。みるめなのりそ取らんとて。海夫共海に下り漬たりかつきの爲に浮き沈む。去る間武藏坊辨慶は。とある岩間より。螺にみるめの着いたるを取り上げて御前に参らす。螺は生きて動けばみるめも共に動く判官御覽じて御前の都に御座あらば。斯様に動くみるめをば如何にして御覽候べき。遠國の果てにても。某が徳により。斯かる名譽の玩びを御覽ずるよと。仰せければ。御前取り敢へさせ給はで。都より波の夜晝浮かれ来て。道遠くして憂き目見る哉。判官聞召されてああら殊勝の御詠歌や候。即て御返歌を申さん

とて。憂き目をば藻鹽と共に搔き捨てて喜びとなる。すすの岬や。この歌に慰み。今は舟路も便りなく。遙々の廻りをして越中へこそ急がれけれ。磯傳ひ峰傳ひ。絶え絶え細き谷の道。石動山を伏し拜み。越中の國に聞こえたる六動寺の渡りに着かせ給ふ舟に乗らんとし給へば。渡守が申しけるは。この渡りは南都造營の爲なり。賃無くしては渡し申すまじい辨慶聞いて。如何なる津泊り關にても。山伏の法にて賃といふ事はなきぞただ渡せと申す。ふつつと叶ひ候まじい。舟賃無くばただ御戻り有れと申す。賃は無し急がしし。遅参せば跡よりも。如何なる事か出て來なんと。御前の紅の。千入の袴を取り出だし。詮方盡きて舟賃にこれこそあれとて賜びにけれ。

渡守が見参らせ。これはわれくが見知り申さぬ物にて。不足には候へ共。さらば渡し申さんとて。六動寺を漕ぎ出だしはうしつをあよみ過ぎ、いわくせの渡り今日もはや。打出の宿と打ち眺め。御通りありし處々。旅人数多行き逢ひて。これより奥への道ながら少人を歩ませ申し。ていかでか下り。給ふべき喃山伏と申しけり。さては舟路ならでは行くべき便り有らばこそ。便船あれかしと仰せければ、折節越後の直江の津へ下る舟こそ候ひけれ。この舟に便船し。直江の津に程無く着かせ給ふ。御舟よりも上らせ給ひ。直江の太郎が宿所に一夜の宿を借り給ふ。浦の人々さし集まり。内議評定する様は。そもくこの浦は當國のこう善光寺へ参る道。總じて数多の道辻

制札の上。見も知らぬ山伏達の。せいく着かせ給ひたるは。判官殿か怪しや。いざく咎め申さんとて。我れもと覺しき浦の人。七八百人さし集まり弓箭を帶しひしめいたり。御宿の女房は情ありける者にて。辨慶を招き寄せ。囁き申しける様は。痛はしや客僧達を。判官殿なりとて。搦め取り。鎌倉へ具足申さんと。大勢率し只今向ふなりと申す。辨慶聞いて打ち笑ひ。嬉しくも聞かせさせ給ひて候や。去りながらわれくは。羽黒山の山伏にて。別に仔細はよもさうじ御心安く思召せと。左あらぬ體にもてなし。さて君の御前に参りこの由斯くと申しければ。義經聞召されて。あはれ實に義經は如何なる月日生れけるぞや。天に業の網を張り地にさかもぎの

關を据ゑる。五尺に足らぬ。形骸を隠し兼ねたる悲しさよ。去りながら口多くしては言葉の誤りも有るべし。御邊達は山伏の。嶺のこき取學びにて上の山へ入り給へ。義經一人残り居て。問答して見んするに。陳じ損ずるものならば。合圖の貝を吹かうぞ。その時下り降り共に腹を切り候へ。げにくく尤然るべう候とて。傍に立ち忍ぶ。その跡に浦の人。雲霞こうしやに押し寄せ。鎌倉殿の御舎弟。大輔判官義經の。御着き有つたる由を承り。直江の太郎が御迎に参りて候。はやく御出で候へ。鎌倉へ具足し申さんと大音擧げて呼ばはる。判官聞し召れて。何判官殿とは何處に御座候ぞあう去る事あり。何時ぞやの事かとよ。平家を攻めさせ給はんため。十萬餘騎を率し。

奥よりも打つて上らせ給ひしを。羽黒の傍にて。そつと見参らせ候ひしが。只今も千騎に劣る事はよもさうじ。やはか斯程の小勢にて叶はせ給ふべきぞ一夜の宿の情に。山伏共に具足賜べていの御件申し。一方防ぐべしと仰せければ。浦の人々承り。以つての外に相違してあきれて爰に立つたりけり。直江の太郎が申しけるは。判官殿と申すは。丈小さく色白く。向ふ齒反つて猿眼に。赤髯にましますと承つて候が。只今斯様に仰せらるる山伏の形相判官殿において疑ふ所なし。御出で候へ。判官聞召されて。さて面々は。眞に仰せ候か。序をもつて音に聞く。鎌倉殿とやらんを見て通らうにとうして連れて行き給へ。浦の人々承り。いや／＼しもさもなき山伏達を。判官殿

舞の本 笈さがし

なりとて搦め取り。鎌倉迄遙々と。具足したればとて、
 させる功名はなくして。山伏共に呪咀はれ善かりつべし
 と覺えず。所詮笈を賜はり中を見ん。眞の山伏行者なら
 ば。山伏の道具持つべし。空山伏にて有るならば。山伏
 の道具よも持たじ。笈を賜はり中を見んと聲々に申す。
 判官力に及ばせ給はず。八張の笈を取り出だして浦人の
 方へ渡し給ふ。浦の人々この笈を取つて行き。中を開い
 て見てあれば先一張の笈には金剛界の曼陀羅。護摩の次
 第しよその法の。數を盡して入れにけり。珍らし文か怪
 しやと疑ひ申す所に。くがみの寺よりも。法師一人來つ
 て。悉く拜み知つて悪しくして罰當るなとて元の如く
 に取り納むる。二番の笈の中には。顯密二種の法。しや

つけうのとめいあり。これも忝しやとてもとのごとくに
 取り納むる。第三番の笈にはいや三鈷獨鈷鈴錫杖。くは
 し花皿を入れにけり。四番の笈中に五大尊の靈像不動降
 魔の諸天尊の數を盡したり。五番の笈の中には。返牒
 願文往來。假字眞字の手本。弘法の御自筆。道風の震ひ
 筆。秘品の數を盡したり。知るも知らぬも押し並べて。
 尊しと申しつつ手を合はせぬはなかりけり。笈に仔細
 の候はばこそいざ戻らんと申す。直江の太郎が申しける
 は。如何に方々。一切の事が率爾にては叶はぬぞ。残る
 笈を誰が爲に置きたるぞ只懇に探せと申す。げにくこ
 れもいはれたりとして。又次なる笈を取つて行き。中を開
 いて見てあれば。判官の都より持たせさせ給ひたる。萌

黄句の御腹巻。小手具足を取り出だし。これは山伏の道具さうか。判官聞こし召されて。さては面々は。當國の小山寺の山伏達にならつて。羽黒山の山伏の禮儀をば知ろし召されぬよ喃。抑羽黒山と申すは役の行者のこけの道。山伏の秘書あり爰にあゆとと名付けて。我が儘にふるまふ方あり。山伏これを嫉み瞋意の怒絶えせず。これに因つて武器弓箭を持たぬ法師が有らばこそ。この邊にもあい善き賣具足やさう御ひけいあれ。山伏の甲冑持つ事。諸方に隠れ候はばこそあら世間狭や面々。げにげにそれも嘸あるらんと。又次なる笈を取つて行き。中を開いて見てあれば。御前の都より持たせさせ給ひたる。五尺の鬘七尺の懸帶。唐の鏡十二のかけご入りたりし。

手箱などを取り出だして。これも山伏の道具さうや。ああら殊勝と。行ひ澄まさせ給ひたる。山伏の道具共や候。さればこそ判官殿なれと聲々に申す。判官ちつとも騒がせ給はず面々の不密は道理。去りながら掛帶鬘裝束の謂れは。この法師が爲に姥御にてましますは。羽黒の權現の一の神子たるにより。今向ふさんじつかうの。神輿の御供申さんため。都より買ひ下し給ふ。さて又かけご手箱は。越中の國水橋を通りし時。水橋殿の姫君の瘡病を強くいたはり存命不定におはせしを。この山伏の中に驗者の上手有るにより。七日泊り加持し。忽ち驗に着け申し。これに因つて財寶を。ほそんの前に取りかくる。覺束なくば使者を立て水橋殿へ問はせ給ふべし。浦

舞の本 笈さがし

一人々これを聞き。斯様に御述べ有らんには。何處に詰
めがさうばこそ。御身にてもましませ。同行にてもまし
ませ。是非一人賜はり。鎌倉へ具足申さんと聲々に申す。
判官力に及ばせ給はず腰なる貝を取り上げて。二つ三つ
吹き給ふ。貝の聲も静まりければ。上の山に隠し置く人
人に武藏坊辨慶。常陸坊海尊。龜井片岡伊勢駿河この人
人を先として打刀まさかりを。面々に持つて亂れ入つて。
何とて和法師は。貝をば吹くぞ。夫れ山伏の貝吹くは約
束が有つて吹くものを。左右なう貝を鳴らす事。ひがご
となりと申しつつ義經を中に取り込めたり。判官聞召さ
れて。喃静まり給へ方々。この浦の面々この法師一人取
り詰めて。判官になれ。義經になれと仰せあれと氏も種

性もなきによりならじと申し候を。只なれくと仰せ候
程に。餘り詮方盡き果てて只今の貝を吹いて候御免あれ
やと仰せけり。辨慶がこれを聞きさては奇態な事かな。
羽黒の方の山伏に由なき事を言ひつけ。判官になれ。義
經になれと。何事ぞ。とても事にてあるならば直江せ
んけを我等が棲家となすべきなり。爰に立つたる大夫殿
見知らぬ顔には居たれども。六ちやう舟の船頭。七月の
始。あひた酒田を漕ぎ出だし。八月の始。越前の國とか
や。敦賀の津に聞こえたる。せいしが本を宿として七里
半。あちの中山かい津の浦より舟を立てて大津の上り
大津の。かう大夫が許を宿として。一年に一度づつ。下
り上りし給ふ六ちやう舟の船頭と見ないた事は空事か今

舞の本 笈さがし

こそこめは見るとも明年の夏の頃 何處にても参り合ひ。
ああら痛はしやこのわん(返)禮を申さんとて。からくと笑ひ
ひければ浦の人々これを聞き。判官殿にて御座あらば。
我等が舟の着け所やはか。知ろし召さるべき事のこはら
ぬその先。此方來よ浦の人々と一人二人逃げて行く。辨
慶續いて追つ懸け。大音擧げて申す様。何とて面々は笈
をからげて返さぬぞ。夫れ山伏の懸笈。私ならぬ事ぞと
よ。嶺の八たい。金剛童子の乗り移り給ふなる。懸笈を
不淨の身にて。取り出だし候て。只は置くべきか笈から
げて得させよと續いて追うて出でければ。手を合せ立ち
戻りけん(疑)ぎに咎はさうばこそ。何事も打ち忘れて。御免
候へ。少人も御座有れば傳馬なんどの御用は御目に懸か

るべしと云ふ。左しも賢き浦の人。御戒力におされてそ
の後物を申さぬは道理とこそ聞こえけれ。
その後判官武藏を召され。陸を行かばこの先に。又物憂
き事も有るべし。便船有れかしと仰せければ。辨慶承り。
殊の外に腹を立て。總じて我が君の。此處にても便船。
彼處にては便船と。便船好し給ふに因つて。斯かるむつ
かしき事も出来候。四國西國の御合戦は。皆舟戦にて御
座候ひし間。舟路の事をも大略心得て候。舟を買ひ取つ
て我れと漕ぎ下らんに。何の仔細候べき。判官實にもと
思召し。直江の太郎を召されこの邊にあひよき賣舟やさ
う御ひけいあれ。直江承り。餘所をひけい申す迄も候は
ず。小鷹隼波潜。石割太郎呼子鳥とて。舟をば數多持つ

て候御用に任せ召さるべし。判官聞召されて。その小鷹
といへる舟如何程もせよとて。秘藏に思召す御腰の物を。
直江の太郎に下し賜ふ。直江御腰の物を賜はり。我が宿
所に罷り歸り。舟具足ひしびしとし繕ひ。舟押し浮めて
早召されよと申す。十三人の人々はわれもくと召され
けり。憂かりける直江の津を事故なく漕ぎ出だし。順風
を得て帆を舉げけり。雲海漫々として際もなし。雲の波
霞の烟わけがたし。蒼波なほ道遠し。汀の海は錦に似。
雁北天に飛びにけり。何れのせいけつか。義経と諸共に。
歸らん事を得ん事は菅丞相の詠なり。羨ましやな雁金は。
葉月にならば來こそせめ。義経は何時の時に都へとてか
歸るべき。せめて玉章許りをば。言傳んとたまひつつ。

歌を詠み詩を作り舵を取り帆を舉げて波路遙に吹かれ行
く心指しこそ哀なれ。
斯かりける所に。佐渡の國北山の嶽よりも黒雲一つ
立ち蔽ふ風か雨か怪しやと仰せけるところに。越後の國
藏王堂の上よりも雷電雲を響かす。あは氣色の悪いは。
山蔭風の隠れ島。何處にかある舟寄せて。この難を免る
べしといふ。いはせも果てずして。大風梢を吹き碎き渚
に砂を飛ばすれば平々としたるうん海に。雪の山こそ多
かりけれ。水を天に吹き上げ逆の雨とぞ成つたりける。
上下舟に酔ひ給ふ。その中に取つても。義盛と辨慶。二
人許りこそ。大肌脱ぎに肌脱いで。艫舳に立つてぞ廻り
けり如何にもしてこの舟を磯へ寄すべからず。荒磯に舟

を寄せ。舟損じては叶ふまじい風に任せて舵を取れ。帆
菰が風に揉まれなば。帆板を切つて風を通せ尙しも風が
烈しくば。大綱小綱を切り落し纜に結び付け引かすべし。
取舵より水入らば。面舵へ乗り直せ。龜井片岡は戰場許
りの嗜にて。斯かる時には。前後不覺に。見え給ふもの
かなやあ舟底に下り立つてあかゆをなりともかえ給へ。
假令この舟が。鬼界高麗契丹國へ落さるると申すとも
われく二人あらんず程は何の仔細の候べき。我が君と
申す。判官聞召されてあの義盛と申すは。伊勢の國の者
にて。渡りの舟に習つて。舟路の事をば心得べきが。不
思議やな武藏は。文にも武にも達者なるが。舟路の事を
もこれ程に心得けるが不思議さよとそぞろに褒めさせ給

ひけり。あら痛はしや御前の。御身も只もおはせぬに
荒き波剛き風に弱り果て。丈と等しき御髪を波と涙に搖
り流し。むづかる聲も。弱り果て今を限りと見え給ふ
十一人の人々は。この由を見參らせ。げにく夫婦の中
程に。割り無き事はよもあらじ。痛はしや御前の。都に
御座の御時は。七重の屏風。八重の几帳。九重の幔の内
御簾吹き反す。風をだにも人かと厭ひ給ひしが。今は何
時しか變り果て。斯かる遠國波島にて。さて果て給はん
痛はしやと鬼神を偽く。輩も不覺の泪流しけり。
コト。斯くて黒雲次第に引き蔽ひ。偏に長夜の如くなり。
今迄は有りとも覺えぬ舟共が。その數數多ほの見えけれ
ば。助船か嬉しやと仰せける處に。左はなくして。赤旗

指し連れたる武者共が如何程も多く湧き出でたり。不思議に思召す處に。舟の内に聲有つて。宗盛父子これに有り。東國の九郎冠者戀ひしやと。呼ばはりかけ近づくと見ゆる。能登殿と覺しき人。小舟に梶取召し具し近づくと見ゆる。二位殿と覺しき人。先帝を抱き參らせ。只今海底に身を投げんとて。義經の方を怨めし氣に見て立せ給ふ。辨慶これを見て。所詮引導せばやと思ひ。舟底につつと入り。頭巾篠懸打ち懸け。船の舳板につつと立ち上つて大音上げて呼ばはる。昨日は西の海岸にて。多勢の歎を見今日は又北國の郷にして。眼前歎をなす事は。夢幻の如し。有爲の法はさながら。今吹く風の如くなり。むさの願をなす時は。今立つ波の如し。大小の議論は。

風に因つて形あり。一つの風が有ればこそ。多くの波形あれ。風波のにげんは。迷ひの前夢なり。人海くうかいにしてしやうとなし悟る時は風も波もあらばこそあら痛はしや平家には。去んべき智者のなければこそ。多くの怨靈を。佛にはなさずして。執着とうしやうに。輪廻し給ふ痛はしさよ。只今申す。辨慶が引導につき發心の一理を悟つて輪廻の羈を離れて。妙覺無爲の位に。就かせ給へと申す時。二位殿の聲として。昔は一天の國母とし萬乗の聖主と有りしかど。今は又御裳濯川の流れるり波底に身を入れし。愁歎のていきう。あつくの執念は。砂よりも尙多し。これに因て六道おほくのさとを廻り三津。八難のきうこうを。遁れ難く思ひしに只今申す。辨

慶が引導につき。發心の一理を悟つて輪廻の羈を離れて。妙覺無爲の位に。着いたることの嬉しさよ。昔は敵今は導師と成り給ふ暇申してさらばとて。波の底に入り給へば風も波も静まりて舟は小波に揺り据ゆる。かくて御座船をいつくともなく押しよせ。上りて問せ給へば。越後の國寺泊と申す。後へは戻らざりけりと御悦は限りも無し。この里人が申しけるは。これより先はねずみつきの關とて。世の初まりより候が。鎌倉殿よりも。判官殿の御姿と。御内の辨慶の姿を繪圖に寫し。關所の前に高札を打つて置かれて候が。山伏の禁制もつての外に候。辨慶聞いて打ち案じ。この關屋をも。某が謀にて通らうずるにて候。所詮熊野より下向する。先達と號し。某は傳

馬に乗つて通るべし。恐れながら我が君をば。あいのふに作りなし申し。中の篋笠を貢せ申すべし十一人の人々は。笈篠懸を取り隠し皆々男に成り給へげに。尤然るべう候とて。十一人の人々は本の男に成られけり。辨慶は傳馬に乗つて。關所の前をとどろがけして通す。その日の關守井澤の與一が候ひしが。關の戸をはたと閉て。制札を御覽ぜよ。叶ふまじいと申して萬事を捨てて支へける。辨慶これを見て。都よりこの國迄。山伏の禁制とて。辻々に札は立ちぬれども。この法師は年々熊野へ參る徳により。關守共が見知つて。難無うこれ迄通したるに。この關屋にて只今。打ち止めんとは何事ぞ。熊野の權現はおはせぬか。關守の奴原を。竦めて賜び給へと。

いらたか珠數を取り出だし。さらくと押し揉んで。熊野の方を伏し拜む。關守上下怖れ恐ろしの人の勢や。この人々を關屋にて。打ち止めんと申すとも。國が半國。搖ぎ候ても。一人も討つか。討たぬでこそ有るべけれ。中の事を仕出だして。關所の者共。残り少く討たれては。何の用に立ちさうべき見ぬ體知らぬ由にして御通しあれと申しけり。井澤の與一がこれを聞き。げにく。これはいはれたり。如何に喃先達坊判官殿の御内の。辨慶と云ふ人に似させ給ひたる程に斯様に申したれども。御通りあれと申し。關の戸を明けて通しけり。心の剛なる徳により。鰐口を免れて鬼神が門を出でけるを褒めぬ人こそ無かりけれ。その後判官殿。中の篋笠を漫に

負はせ給ひ。片目を塞ぎ。かたこしをひき。關所の前を通らせ給ふ。關守共がこれを見て。爰にあいのふにさされたる男こそ。下司分の中には生れ付きたる判官殿なれ。例へば腰はひかばひけ片眼をだにも潰さずば。定の判官殿よと。一度にとつと笑ひければ。十一人の人々は生きたる心地もなかりけり。辨慶は馬の上よりも大音上げて申す。やあ剛力。さなきだに山の内は。村雨の繁きに。ややもすれば。下がつて。道者を濡らす不道さよ。歩めと云ひて持つたる鞭にてちやうくと打つたりけり。判官御覽じて。御身の様に馬に乗り樂して下る人だにも。宿に着きぬれば腰が痛いなどとして。人に腰を打たするこれ程重き荷を負うて。得こそ歩むまじけれと。泣く體

にもてなし急がせ給ひける程に最上川にぞ着き給ふ。
 投コトバげ棄すて給へば。辨慶走り寄り宙うらにておつ取り三度戴かぶき
 頭かぶを地ちにつけ。たばかり事こととは申しながらも正ましく主君
 の打うつ杖えの天命争あで免まれ候まうべき只今の辨慶が狼藉ろうじやくをば。
 佛神三寶ぶつじんさんぼうも宥なませたたび候へとして。鬼おにの様ようなる辨慶が。東
 西せいを知らず歎なげきければ。十一人の。人々も皆みな泪なみだをぞ流ながし
 ける。判官はんくわん聞召きこして。よし。武藏殿むさしだん。佛陀ぶつたにも因
 果いんがは免まれさせ給はず。ましてや末世まうせにおいて。破戒はかいの凡
 夫ぼんぷの身みとして。争あで因果いんがを免まるべき。殊ことにこれは。辨慶
 が打うつ杖えならず。舍しや兄あに頼朝よりの遊あそばす杖えと思おもへば。これを
 怨うらと思おもふまじ早々はや舟ふねに乗のれやとて。川舟かわふねに召よされけり。

遙はるかの川上がわのうへに。鵜うと申まうす鳥とりが數多かず下り居ゐて遊あそびけり。御前
 御覽ごらんじて。如何いかに武藏殿むさしだん。あれなる石いしに。下り居ゐた鳥とりは
 何なにといふやらん。鵜うと申まうす鳥とりでさう。御前ごぜん聞召きこし一首いっしゆの
 歌うたに斯いかく許ゆるり。最上川さいじやうがわ如何いかなる神かみの誓ちかにや。うるたる石
 の流ながれざるらんと斯いか様に詠よじ給たまひて。急いそがせ給たまひける程
 にあねはの松龜割坂まつかめわりさかに着つき給たまふ。人々ひとびとの嬉うれしさ譬たとへん方
 はなかりけり。

高館

去る間鎌倉殿梶原平三景時を真近く召しての御証には。寔に義経が謀叛に於いて疑ふ所なし。急ぎ義経を退治し。世を治めんとの御証にて。長崎の四郎に三百餘騎を下し賜ふ。長崎三百餘騎賜はり。急ぎ奥にも着きしかば。催促廻し勢揃へ。泰衡が館に寄り來し。照井の太郎を筆取にて。着到を附くる。總領なれば泰衡一の筆に附く。次に錦戸四郎もとよしひづめの五郎のくみをくりを先として宗徒の兵七千三百餘騎と早や着到に附くる。抑比は何時なるらん。文治五年閏四月二十七日。今日は日柄佳からず。明日の辰の刻に向ふべしと定めて。太田山口中

村に既に陣取つて控へたり。扱も高館殿には。宵までは侍八人。大將共に九人と聞こえしが。次ぐ日の御合戦に侍九人。大將共に十人の由來を委く尋ぬるに。紀州熊野の住人に鈴木三郎重家にて。物の哀を留めたり。或夜鈴木女房に語りけるは。某思ふ事有之。この曉奥州へ罷り下り候ぞや。心の儘に罷り下り。君も目出度う御座あらば。明年の夏の比便の文を参らせん。夏の比しも過ぎ行かば。浮世は不定の習にて。道の草葉の露霜と。消えぬるよと思召し後世をば頼み奉る。暇申してさらばとて。地體が鈴木殿。熊野育ちの人なれば。山伏の姿に様を替へ。笈取て肩に懸け。物憂き竹の杖をつきその節々に夜を込めて。藤代を

立ち出で。早や九重に着きにけり。人目忍ぶの旅なれば。何時しか花の都をば霞と共に立ち出でて。大津の浦より舟に乗り。上津の浦に上りつつ。北國道の憂き難所を下らせ給ひける程に。七十五日と申すには。奥州衣川高館の御所に著きにけり。
 コトバ
 鈴木何とか思ひけん。笈篠懸をば傍に取り置き。打掛取り出し著るままに。編笠深々と引つ被うて。高館殿の門外に寄つて。御内の體を聞き居たり。扱も高館殿には。敵向ふ由聞こえければ。侍達を召さるるに。何時も變らぬ武藏殿を先として。以上八人畏る。判官御覽じて。如何に方々。義經が運命明日を限なり。方々が手にかかけ。某が首を取り。關東へ參らせ。頼朝の御目に

掛け。勳功の賞に預らば。奉公の忠には後世を吊へ。武藏坊辨慶は。中々あささへわらたる許にて御返事を申さず。片岡龜井の六郎が。目と目屹と見合せて。こは御詫とも存じ候はず。誰かあつて御首を賜はり。降參をば申すべき。今迄候人々も。皆御供とこそ思すらん。さにはありながら此中にも。落ちんと思はん人のあらば。小に暇を申し落ちよ。誰も怨みは残らずと。座敷を屹と見渡しければ。よししたけ廣綱一同に。涼く申されたる物や。誰もか様に。申し度き御返事にて候ぞや。思ふに敵。曉寄すべし大手。搦手と。二手に分けぬ事あらじ。味方は假令無勢なりとも。兩陣にむらがつて。軍は花を散すべし。未だほのぐらき早朝にあれば大手。これは搦手

なんととて聲をば聞くと姿は見じ。我も人も心靜にある
 時に。上へ申して御アナル酒賜はり。最後の名残を惜むべ
 し。尤然るべしとて。種々の大瓶大筒を御ていへ申し出
 しつつ。君も御出ましくて。女房達の御酌にて。上に
 盃据わりければ。下は以上八人なり。三獻の酒据われれば
 後には互に入れ亂れて。思ひ指し思ひ取り。自酌自盛の
 樂遊び。舞うつ歌うつ飲む程に。龜井飲うだる盃を。武
 藏殿に。思ひさし立つて舞をぞ舞ひにける。蓬萊山に
 は千歳經る。松の枝には鶴巢くふ巖がかたに。龜遊ぶ。
 志ほりみつかしら。鳴のいれくひをひとみもうて。
 鳴の羽がへしを颯と舞うて。立ち廻る所にて。門外
 を見てあれば太刀脇挟んだ男の。編笠眼深に引つ被う

たるが。唐居敷に。腰を懸け龜井が舞を。聞き居たり。
 コトバツレ 龜井六郎もあれは誰ならんとは思へども。思ひ寄
 りなき事なれば。舞すでに舞ひ納め。酌に手懸て居たり
 しに。門なる男の聲として大の聲音をさし上げ。御内へ
 案内申し候はんと高らかに呼ばはる。下大夫 鳴を静めて座敷
 には誰あらんと聞く所に。西塔の辨慶が。この聲を聞き
 付け。あれは敵の奴原が。下 案内検見のその爲に。偽學
 んで來つてさう。何様てうの使を。餘すまじいと云ふ儘
 に袴のそばを高く取て長刀おつ取り出でんとする。龜井
 の六郎も續いて座敷をつんと立ち。武藏が袖を引つ止め。
 静まり給へ武藏殿。不思議やこの聲を聞いたる様に思ふ
 とて。フシ 龜井走り出でて見てあれば。舎兄鈴木の三郎殿。

旅寢に面瘡せて一人爰に立ち給ふ。龜井は夢とも辨へず。するく走り寄り。鈴木が袂に取り附けば兄も弟に取り附いて扱て如何にくと計り遙に有つて鈴木殿。何事かあるか龜井。龜井この由承り。その事にて候ぞ。秀衡浮世に在りし程は君をも尊み申せしが。有爲無常の習にて。秀衡去年の冬果敢なくなりて候ぞやその子ども我が君に。心變を仕り鎌倉よりの檢見には。長崎の四郎殿を申し下し賜はりて。扱て國の大將に。照井伊達が向ひつ。太田山口中村に陣取りてあると聞いて候。などやか程に御身の思召し立つならば。二年も三年も先に御下りまし。て。一旦樂を。し給ひて思出と思召すべきに。何に詰めたる御運かは。今日下り。給ふこそ悦の中の歎

なれ。今生にてみ見え申すこそ。何よりもつて嬉う候へ浮世の妄執晴れてあり。上にも知ろし召さるまじ。咎め怪む者あらじ。遠近人の。風情にて。御歸りあれや鈴木殿。鈴木殿此由打聞いて。不覺なり龜井龍門原上の土に骨は埋むとも名をば埋むる不覺さよ。師弟主従父子夫婦。三世の奇縁なくしては。何しに今日參るべき。鈴木木が參りて候と。上へ申せ龜井とて草鞋脱ぎ捨て上に着たる。打掛脱いでふはと捨て兄弟連れて判官の御前指いてぞ參りける。義經御覽あつて。如何に珍しや鈴木殿。積惡に餘殃あり。因果歴然の道理に依つて。平家に着せしその科が。今義經に報い來て。明日を限と早やなりぬ。これに

候人々をも。敵の許すならば。落し度くは思へとも。許さねば力及ばず。汝をば人も見知るまじいぞ。咎め怪む者あらじ。遠近人の學にて。はやく熊野に罷り歸り候へ。見し者と思ひ出ば。後世をば吊うて給べ。鈴木ありてもこの軍に勝つべきにもあらず。疾うく歸り候へ。
中大夫鈴木承り謹んで申しけるは。あら御情無の御誼や候君に犯せる科なくして。討たれさせ給ふべき前業如何おはしけむ。何ぞや鈴木めが月日こそ多きに。今日参り逢ふ事は三世の奇縁朽ちせぬ故。軍散じて罷り下りさもあれ君の御最期所は。何處にてか御はしあるらんと思ひ遣り申したる迄にて。
色大夫門の唐居敷に腰を懸けて只一人すこくと腹切らんずる事はなんばう無念に候べき。

是非御具足一領賜つて。打死せんと申し切つて落ちんずる氣色はなし。
ツレ判官聞召されて。この上は力及ばず。いでくさらば鈴木に具足一領取らせんとて。小櫻緘の鎧を召し出させ給ひ。この鎧と申すは。小栗の佐藤が子供が設の爲にとて。緘し立てたる具足なり。兄嗣信は小櫻。舍弟忠信は卯の花を好めば。卯花緘に結構し相待つる所に彼等兄弟は討たれぬ。面目なけれど義經。佐藤が館へ打ち越え。子供が最期を語つて聞かする。母はちつとも歎かずして。
クドキ斯かる家の面目候。御供申し出しより。歸らん事は不定ぞと思ひ設けて候。さはありながら兄弟が若しも御供仕り。罷り下りて候はば。取らせんずるその爲に。具足を二領緘し立つるこれく御

覽候へや。待つて甲斐なきこの記念を見つる事の果敢なきよ。上誰に鎧を取らすべき。我が君に参らせん。小櫻緘を義經に。卯の花緘を武藏殿に。得させたる具足なり。一つに彼等が記念といひ二つは札良き具足なり。自然の事のあるならば。義經着せんその爲に。これ迄持たせて侍れども。御邊にこれを取らするとて。同毛の三枚冑に。打物そへ鈴木が前にとりと置いて。旅囊に左こそあるらめ早そこ給はれ鈴木殿。鈴木面目施して。御代が御世の御時に。千町萬町賜つたるより今この鎧にしかじとて。かはらけ取り上げ三杯汲んだ中る鈴木殿が所存をばいや褒めぬ人こそ無かりけれ。涙をばら

武藏坊辨慶は。

少しもしほれぬ眼より。

涙をばら

はらと流し。異國は知らず本朝において。我が君の御内の人々の様に揃うたる事あり難し。それを如何にと申すに。一歳嗣信忠信が討死。伊勢駿河が京鎌倉にての死様。唯今鈴木殿が。御具足一領賜はつて。千町萬町の御恩に換へじと悦うづる事よ。か程迄良き郎黨を持ち給ふ我が君の。御果報の程のうたてさは。せめて大國四箇國御知行なきこそ口惜けれ。奥方の奴原が何千騎にて寄せ來ると云ふとも。公事武者の驅兵。思ふにさこそあらんずらん。今はこの夜も更け行くらん。飲めや歌へやさめけとて舞うつ歌うつ酒盛する。既にその夜も夜半ばかりの事なるに。鈴木三郎重家は居たる所をづんと立ち。中門の廊に出て。弟龜井を近

付け。如何に重清。今度某紀州藤代を出し時。先祖重代に傳はる腹巻を一領着て下る。この腹巻の由來委しく語つて聞かすべし皆傍輩達も聞き給へ。忝くも熊野の權現の古。摩訶陀國の主とて。富王の中の富王にて天下を守り給へば。海内殊に静なり。然れどもこの御門に。御世を嗣がせ給ふべき王子の更におはせねば。如何ならんずる后にか。王子の誕生あるべきと。后の數を揃ふるに。既に于人祝ひ申す。寵愛に思召されたる。后に王子の御座なければ。況してや疎き方様に争てか更におはすべき。されども末の后に。ごすの殿と申すこそ。懷妊とおはしませ。御門叡感斜にて。今は早餘の后。御氣色更下よからず。ごすの殿下うち添ひて。既に一の

后とし内裏に移し申さんと。宣旨有りし折節に。數百人の後達。これを嫉み妬みて。御門御座なき折節に。武夫を語ひてごすの殿に亂れ入り。后を害し奉り深山深く捨て申す。されど如何なる不思議にや死骸も敗れ損ぜず。野干のものもあふさすし満ずる月に誕生ある。しかも太子と御座します。人住む山にてあらざれば。人倫更に立ち寄らず。虎狼野干は立ち寄れども食し服す事も無く守護を加へ奉る。痛はしや太子は。母の死骸の乳味を服し給へば。忽に食となり野干のものを友として。年月を経る程に。天の岩戸の明暮と早七年になり給ふ。下ツメ天下には歎にて。遠國遠里波島迄。尋ね給へどまします。世を憂き事に思召し。既に早位をすべり給ふ折節に。下た

ふとき人のましまして。居所を尋ね給ふとて。山中に分
け入り。太子を見付け奉り。内裏に歸りて奏聞申す。臣
下卿相。不思議の思をなしつつ。山中に分け入り。委
しく見奉れば。形はごする殿にしてその面影も變らず。
太子御年七歳なり。人を見馴れ給はねば臣等邊へ立ち寄
るを。怖ち戦かせ給ふを。ちけん上人走り寄り。太子を
抱き取り申し。ごする殿の死骸をば。山中に廟を築き。
込め奉りその後に。太子をば雲上へ移し奉る。御門不思
議に思召し。ちけん聖を召されて。委しく問はせ給へば。
聖も如何で存知せん。山中に到つて。樹下石上を心掛け。
居所を尋ぬる折節に。太子を見付け奉り。奏聞申して候
と。有の儘に申す。御門叡覽ありあう濁れる世に生れて

戒を保つこういんに。斯かる罪を作る由は。まろが科に
てあらずや。斯かる物憂き國には。ありて益なき事とて。
萬里の飛車と申して。虚空を翔る車に。今の太子諸共に。
既に乗じ給ひけり。第一の臣下に。のうみの大臣重高。
おくみの中將兼光。彼等二人を友として。車の榻に乗じ
て。東を指して飛び給ふ。我が朝紀伊の國牟婁の郡おと
なし里にしてはまた。熊野權現と現れ。衆生を濟度し給
へり。ごする殿の王子は。若王子にておはします。のう
みの大臣はこもりの宮と現せらるる。おくみの中將は飛
行夜叉これなり。この御跡を慕ひて。ちけん上人飛び來
つて聖の宮と現せらるる。其の外的神達は。次第次第に
歸朝して。ししよ明神。五大王子勸請十五社金剛夜叉。

四郎ツメ 同音 けげの鎧著胃の緒を締め太刀佩き矢負ひて下
皆ながら。唐櫃に腰を掛け。目と目屹と見合せたる。こ
の人々の有様は。樊噲張良安祿山も。面を側めつつ恥ぢ
ぬべし。その中に取つても龜井の六郎重清は。一際秀
れて扮装つたり。肌に取つては唐紅引つ違へ。美精好の
はつたるに。寄掛目結の直垂の括を結つて締めたりけり。
楊梅桃李の左右の小手。白檀琢の膳當。熊の皮の揉足袋。
銀にて縁金互し。踵高に踏被うたり。獅子に牡丹の脇楯
し。唐錦緞黃金札の腹巻さつくとゆり懸け。糸緋緞の
鎧二領重ねはらりと著。躍り上つて高紐かけゆつて上帯
丁と締め。九寸五分の鎧通を馬手の脇に指いたりけり。
一尺八寸の打刀を十文字に指す儘に。三尺八寸候ひし青

江作の太刀佩いて。四十二指いたるたかうずべうを。斜
高に取つてつけ同毛の五枚胃に。鋏形打つて猪首に著白
綾の母衣を颯と懸け塗籠弓の四人張。せめのせき弦懸け
させ。眞中握り横へて。四間のてるより中門へ搖ぎ出で
たるその有様物によく。喩ふれば。めいほく太子はく
た王。我が朝にては將門純友吉野山にて名を擧げし。奥
州の忠信も。只これ程はありつらめ。きりやうに寄せて
出で立つたりやと聲を揃へてほめたりけり。ヨトバツレ
て奥方の軍兵も打つ立つ由こそ聞えけれ。先大手へは、
時の執權人長崎殿を大將にて。三千八百餘騎衣川大手の
門に押し寄する。搦手はたてとりの海。二千五百餘騎西
の門に押し寄する。御所の手は大手は鈴木兄弟兼房唯

三騎にて固めぬ。搦手をば鷲尾片岡熊井太郎源八兵衛廣綱以上五騎にて控へたり。辨慶はうき武者にて大手の櫓に走り上つて。軍の下知をぞしたりける。龜井の六郎重清も。同櫓に上り。冑を脱いでとうと置き。弓取り直し弦食ひ濕しすぎしてこそ立つたりけれ。兄の鈴木弟龜井を見上げてきつと見てや。御邊は櫓に上りたるや。龜井が聞いてさん候此所と申すは。平城にては候へども。久しう拵へたる所にて。堀廣うして底深し。如何に敵が詰め寄せて。埋草を込むと云ふとも。三重の堀をば只。一時にはよも埋め去らじ。その時重家重清兄弟と名乗つて切つて出で。奥方の奴原に手並を見せて呉れさうべし。鈴木聞いて。あうよくいつたり龜井。但し

重家は長旅に腹巻に肩引かせ。矢束も矢坪も覺えねども。さらば射て見ん龜井とて。同櫓に上る。斯くて寄手の人々は。大手搦手申揉み合せ関をとつと上ぐる。六種震動斯くやらん。天地響て夥し。城には以上九人の人々軍の法優くも。関ををつとぞ合せたる。物によく。譬ふれば。雷互る春の野に古巢を出づる鶯の初音を告ぐる如くなり。関の聲静まりければ。照井の太郎高直。一陣に駒驅け出し。如何に御陣へ申すべきことの候。昨日迄判官殿を。主君と仰ぎ申すといへど。鎌倉殿の御意に背きおはします。さるによつて長崎殿。御教書を帶し御下向のその上。天下に住みながら。祝ひ申すに及ばざるによつて。義經の御自害ましまさば。介錯申せとの

御使に。高直参りて候と。申させ給へ人々と。弓杖に絶つて控へたり。武藏坊辨慶は。櫓の歩の板を。毀れよととうくと踏み鳴らし。何かう云ふは照井めかれ。下角打つたる冑を着。容儀骨柄ゆしくし。よき馬に乗つたれば。秀衡が子供の中には。誰なるらんと思ひしに。陪郎黨の照井か。この門外迄参り来て。馬の上にて名乗る様。狼藉なりその陣をやあ引いて退けとぞ申しける。照井の太郎がこれを聞き。斯く宣ふは。武藏殿か事珍らしき雑言かな。君を深く尊めば。臣を敬ふ道理あり。鎌倉殿の御教書帶し今日の大將給はつて。罷り向つた高直にて。和人共をば眞實に。物の數とは思はぬなり無用の廣言申さんよりも甲を脱いで弓弦を外し命を接げとぞ

申しける。武藏坊辨慶も。言葉なくして立つたりける。龜井の六郎が武藏が邊へ立ち寄つて。なうく武藏殿。神明をも尊まず。ぶめいにも恐れず。法に任せて振舞ひ候傍若無人の奴めには。何を仰せ候とも唯げんをけうするに似たるべし。無用の論を止め給へ君こそ御腹召さるるとも。我等が斯くて候へば軍は花を散すべし。斯う申す兵を如何なる者と思ふぞ。熊野權現の一の臣下のうみの大臣重高よりも十六代の後胤。鈴木庄司の次男。龜井の六郎重清。年積つて二十六。照井殿に矢一筋奉らん矢受けて見よと。いひもあへず。四人張に十四束。取つてかうと打ち番ひ。本弭末弭一になれときりくと引きしぼり。まぢを拳に引つ懸け。ゑいやとかつて打つたる

はとうづきなんどのごとくなり。一陣に進んだる。照井が舍弟に。たか野の二郎が。駒ひつそばめて控へたる。鎧の袖の三の板。妻手の脇楯おくれの板。きものたばねをすすりりと透しあひひきかけて裏をかくつと脱けて餘る矢が。裏に控へたる。照井が馬の太腹に。別せめてづんばと立つ。たか野は痛手なりければ受けもあへせず妻手がへしに鉦をついてどうと落れば照井が馬は痛手負ひ。屏風がへしにひつたとかへし高膝折つて臥しければ。照井は馬より下りたつた。城には武藏鈴木を先として。射たりや射たりと揺り上げ揺り上げ笑ひけり。寄手は射られ音もせず。異國のきんくわが弓の威も只これ程で有りつらんと寄手も舌を捲いたりけり。コトバ 大夫 兄の鈴木。

弟の龜井を見上げて熟々見て。あ、射たりや龜井。この五六年離れ御邊如何程生ひ立つてあるやらんと。心許なく思ひ遙々下りて見てあれば。容儀骨柄よりも勝れたる長矢束の大弓は。世にも不思議に思ひしに。おしでかつての定まつて。射たりや龜井。あ、射たりや龜井。井殿 唯今のその氣色を。紀伊の國に止め置く一族共に見せばやな。君も御出あつて御見物あれかしな。重家も矢一つ射て見せ申さんといふ儘に十三束三つかけの中差抜いて油ひき。矢狭間廣々と引かせ。如何に奥方の軍兵 今の龜井が兄。鈴木庄司とは我が事なり。四國九國の御合戦には。御供申し度々の高名を顯し。御代靜まつて後。紀州藤代は本領なれば。安堵を申し所領に

下り。義經の都下着をば知らず御供申さぬなり。さはありながらこの五六年。紀州藤代にありとはいへど。君の御事龜井が行方。一方ならぬによりさうて。歩行して紀州藤代を出て。急ぐとすれど歩路。日數積りて昨日迄。七十五日にて昨夜着いて。今日の御合戦に逢うたるはなんばう果報の者ぞ。龜井が矢程こそなくともうけて見よとぞいうたりける。下中夫奥方の軍兵は楯の端をつき重ねて鈴木が射る矢を待ち懸けたり。鈴木この由見るよりも。十三束三つがけ。三人張にかりと番ひ本弭末弭ひとつになれと。きりく引絞りに。かなぐり放しにかつきと放す。一陣に進んだる。照井が従弟に。丸田の藤次が。たか野がたうの矢一筋と。進み懸けたる胸板に。

立つより早くつと抜け。裏に控へたる。むき野の四郎が首の骨にひつしと立つ。二騎の武者が溜めずして。弓手妻手へとうとうと落ちにけり。續く軍兵これを見て。この者どもが矢先には鐵の楯をついたりとも。叶ふべしとも覺えずや。この陣引けやと云ふ儘にむらくばつと引いたりけり。上鈴木兄弟櫓よりも。下り拳に。毛よき武者をかいえりかいえり。指し取り引き詰め。散々に射たりけり。矢種盡くれば鈴木兄弟。櫓をゆらりと飛んで下り。駒引き寄せて打乗り。衣川の中の瀬を。水に鷗が一雙波間を傳ふ風情にて。鐙の鼻にて浪を叩かせざざめかいて渡しけり。奥方の軍兵。この由を見るよりも。鈴木兄弟手取りにせよ。太刀も刀もいるべきかとして折り重

つて犇ひしいたり。鈴木兄弟鈴木兄弟。この由よしを見るよりも玉たまに馴なれたる蓬萊ほうらいの鳥とりの風情ふうじやうも斯かくやらん。驚おどろく氣色きしきはなかりけり。大勢おほしぜの中なかへ割わつて入り。西にしから東北とうほくから南みなみ蜘蛛くま手てかくなは十文じふもん字じ八花はつはな形かたちといふものに、散々さんざんに切きつたりけり。鈴木すずきの三郎ざぶらう重家じゆうけ十三騎じふさんき斬きつて落おせば弟龜井あにまが手に掛かけて。二十七騎にじゅうしちき薙なぎ伏ふする。實じつには敵かたきも怵おそへばこそ。風に木きの葉はの散ちる様ようにむらく。ばつと引ひいたりけり。この人々ひとびとは手ても負おはずし。河靜かぜい々と渡わたし戻もどし勢いきほかゝつて控くわへたる異國いこくの樊噲はんたい張良ちやうりやうも斯かくやと思おもひ知しられてあり。木きが合戦がっせんしたる様ようや。流石りゅうせきにあの方々かたがたは。天下てんかの御用ごよう。くじよの軍いくをし習なうたる人々ひとびとにて。敵かたきの色いろを覺さつて。駈か

け引ひいつる心根こころねの面白おもしろさよ。暫しばく人々ひとびと御待ごまちちあれ。出立でつつて來こんと云いふ儘ままに。おていへつつと入り。黒糸絨くろいとじゆうの鎧よろいを着き。先まの梨子なしこ打鳥帽子うちとりぼうしにて。今度こんどは白柄しろがらの薙刀なみちを打ちかたげ。大手おほての櫓やぐらに走はり上あつて。東向ひがしむかにぞ立たつたりける。抑比おさひは何時いつならん。文治五年ぶんじごねん。閏四月うるしごがつの二十にじふ八日はちにちの未だ巳みの刻とき許ゆるなるに。照てりに照てつたる朝日あさひに。物もの具ぐの金物かねものは折柄せがら色いろや勝まさるらん。開ひいた扇あふぎは紅べににて。日に指さし向むかつて立たつたりける。武藏坊むさざぶぼうが有様ありさまはたうはつ毘沙ひさ門もん四天王しつてんわうの荒あれたる氣色きしきも斯かくやらんと。大音おほね上げて呼よばはる。如何いかに奥方おくがたの軍兵ぐんべい。鳴なを靜しずめて事ことの心こころを確たしかに聞きけ。伊い羅ら大夫だふ。それ人間にんげんの命いのちは電光朝露でんくわうちやうろ。打うつも打うたるるも夢ゆめの戲たはぶれ。コトバ。大夫だふ。昨日きのう迄までは肩かたを並ならべ。膝ひざを組くみし面々めんめんが。

今日敵となれるも。因果歴然の道理に因つて世をも人も怨むまじい。さりながら汝等が。遠國に住んでいりとり強盗し。境のはう地論じ。二十騎三十騎。引き分け引き分け。此處彼處にて空印地し。飛礫打つたらんには似まじいぞ。今日武藏がする軍こそ手木よ見習へ。奥方の軍兵。今日武藏が長刀にて。斬り残したらん輩は。見しものと思ひ出ば後世をば吊うて給べ。末代の物語に。辨慶舞を一番舞はうぞやう囃いて給べや人々。鈴木兄弟は。豫て用意やしたりけん。鼓を取り出だし敲き上げて囃す。地體武藏はさんとにても亂舞延年の上手舞をば一手習うたり。長刀の柄をとうくと打つて調子を伺うて立つたりしが。かすみにかすんで。大きなる聲をはつた

とあげ一聲をぞとつたりける。嬉しやとうくと。鳴るは。瀧の水日は照るとも。何時も絶えせじ面白や。花を流すは吉野の川。太夫。筏を下すは大井川。ツレ同音。紅葉を流す立田川。都邊に。名川様々多けれど遠國ながら名所がな。きり山高嶺の。残の雪消え。谷のつららも融けぬれば。衣川の水嵩勝つて。奥方の軍兵を。辨慶が薙刀にて。湊をさいて。斬り流す斬り流すと。揉烏帽子といふ曲を。一拍子はらりと踏んで開いた扇を櫓より。衣川へ颯と投げ入れ扇の落つるより早くあう櫓を飛んで下りたりけり。さんのへたちの白葦毛。七き八ふん。あけ六歳に引き寄せゆらりと乗つたりけり。鷺尾片岡。先驅せんと進んだり。辨慶がこれを見て。いで、武藏が

荒切せん。跡をばこなせ若武者共とて先驅してこそ渡し
 けれ。向はしのぶもとよしたけい丸田を先として。奥に
 は我と思しき者三百騎許で控へたる。陣の中へ武藏。駒
 を颯と駈け入れたり。奥方の軍兵は。陣を二つに分けた
 りけり。されども爰に。高田の太郎と名乗つて。武藏坊
 に渡り合ふ。辨慶これを見て。もつて開いて横手切にか
 んしと斬る。甲の弓手の吹返。表のほうさき。妻手のか
 ぶりの板を掛けて。づんと斬つてぞ落しける。はなさき
 この由を見るよりも。あ切つたりや武藏殿。そこを引く
 なといふ儘に。透間もなく懸りけり。辨慶これを見て。
 もつて開いて。拜み打に丁と打つ。甲の眞甲切り割つて。
 後は鋸母衣附。前は半頭涎金。四枚金胴ひつき草摺二

つに颯と打ち割られて弓手妻手へ捌けたり。柴田の四郎
 がこれを見て。あ切つたりや武藏殿。そこを引くなとい
 ふ儘に。透間もなく懸りけり。辨慶これを見てあう奥方
 の軍兵は。心は剛にありけるぞや。退く風情の見えざる
 は。手並の程を見せんとて。もつて開いて。丁と打つた
 りけり。柴田も聞うる兵にて。かぶりの板にて受け流し。
 さらぬ體にて駈け通す。二陣に續いたる。龜井の六郎が。
 武藏殿の切り残しを。受け取つたりやといふ儘に。青江
 作三尺八寸横手切にかんしと斬る。龜井が腕や強かりけ
 ん。太刀の金や良かりけん。四枚胴を押し掛け。二十五
 差いたる征矢を掛け。まや腰の番をば。車切といふもの
 にふつつと斬つてぞ落しける。上は抜けてどうと落つれ

ば下は鞍に乗つたりけり。これを始めて七騎の人。入り
 違へ揉み違へ散々に斬てぞ廻りける。斯かりける所に土
 佐の八郎高直と。龜井の六郎重清。むずと組んで二人が。
 兩馬の間へとうと落つる龜井は無雙の剛の者。仇と組む
 ならば。大勢定めて折り逢ふべしと。色豫て覺り。土
 佐を取つて押へて。首ふつと搔き落し。立ち上らんとす
 る所に土佐が乳母の十郎が。透をあらせず折り逢うて。
 龜井が弓手の腕をば。水も溜らず打ち落す龜井無雙の剛
 の者。心は高砂や高砂や松の緑と榮ゆれども。痛手を負
 ひぬれば。太刀を杖に突き今を限りと見ゆる。舍兄鈴木。
 大勢の中にて戦ひしが。弟龜井は痛手を負ひ。存命不
 定なるを聞き。敵を四方へ追つ散らし。我が身を屹と見

たりければ。痛手薄手の嫌なく。十三處手を負うたり。
 今は斯うよと思ひて。龜井を肩に引つ懸けて。城の内へ
 つつと入り。高き所に置き。やあそこで腹切れ龜井。南
 無阿彌陀佛と諸共に。鈴木は生年三十三。龜井の六郎二
 十六。刺し違へて死にけるを惜まぬ者はなかりけり。
 コトバツレ 武藏坊辨慶君の御前に参り。早や鈴木兄弟こそ討
 死仕つて候へと申しければ。判官聞召されて。龜井が
 ことは豫てより思ひ設けたること。無惨や鈴木。紀伊國
 より遙々と下り。世になき主の方人して。討たれぬるこ
 そ無惨なれ。今朝より誦む御經も。早やほうなうの時分
 になるに防いでたべや武藏。太夫 辨慶承り今度は某が死番
 に當つて候と申しもあへず。おていへつと入り。鐵を

厚さ五分に鍛はせ。桶皮胴と名付けたるを。刀溜に着たりけり。黒糸絨の鎧。糸緋絨の鎧三領を重ねさつくと着る。びら刀首搔刀三腰までこそ指いたりけれ。長刀こそりはを打ち違へ。鞍の前輪に締め付け。弓手に熊手。おつ取つて。妻手に長刀を打ちかたげ膝にて馬を乗つたりけり。辨慶が駆け出づれば唯小山の動く如くなり。大勢の中へ割つて入る。膝口高股三の腹はらりくと引き破れば將基倒の如くなり。この勢に恐れ。捨鞭打つて逃ぐる所へ辨慶駒を駆け寄せ。熊手を指し渡し。甲の天邊に引つ懸け。えいというて引き寄せ下げ斬りにしてぞ捨てにける。況んやかんわう唐迄。その名を得たる辨慶が今を最後の合戦に。面を合はする者はなし。怒れる眼は黒雲

の所々の晴間より。朝日のうつろふ如くなり。敵を靡けて喚く音。雷霆電光霹靂神獅子象虎の吼うる聲斯くやと思ひ知られたり。辨慶が二度の驅に。奥方の軍兵は百八十騎討たれたり。今は向ふ敵のあらざれば。物臭い軍かな。思うつる事よとて。小高き所に駒駆け上げ暫陣をぞ取つたりける。かかりける所に。信夫の庄司が嫡子。小太郎といつしもの。辨慶が以前の驅足に父を討たせ。一矢射ばやと狙ひしが。早爰にて見付け斜ならず悦び弓と矢を打ち番つて。かいなくつてひようと射た。辨慶がのとくと控へたる。胸板にはつしと中り。小兵の矢の悲しさは。ひそりけるその矢が。内胃へからりと入つて。笛の鎖にひつしと立つ。上大夫ものくしといふ儘に。

矢を搔いかなぐつて見たりければ。鳥のしたにて射たり
 けんからは抜けて根は留まる。さしにも剛なる辨慶も。
 馬より下にとうと落つる。あら無念や西塔の武藏と
 て鬼神の様にいはれしが。斯程の細矢に中つて果敢なく
 ならんずる口惜しさよ。最後に彼奴を斬らずば黄泉
 の障なるべし。さりながら以前の如く。馬に乗つて追ふ
 ならば怖ちて左右なく近付くまじい。所詮虚死始め近付
 かん所を。斬つて呉ればやと思ひ。側なる胃引つ懸けて
 虚死してぞたるみける。信夫この由見るよりも。さこ
 そ人々の。鬼神の様に宣ひし。武藏坊辨慶をこそ。某手
 に懸け。射落して候へ。首取つて見せ申さんといふ儘に。
 いかものづくり三尺八寸。眞甲に指し翳し揉みに揉うて

ぞ走りける。大夫辨慶鉦の隙よりも。見上げて屹と見て。
 天晴器量やよい器量かな。あつたら若い者を。辨慶
 が手に懸け失はん事の無惨さよ。太刀の寸は延びたる
 や。彼奴に一太刀打たれては。悪しかりなんと思ひて。
 近々と詰め寄せ。うしおきにかつばと起き。狼藉なる奴
 めには。手並の程を見せんとて。側なる長刀おつ取つて
 追ひ詰めさらりと薙いだりけり。高勝斬つて落され。の
 つけに反す所を細首宙に打ち落し。朱に染うたる薙刀。
 弓手の肩に投げ懸け駒引き寄せて打乗り。城の内へつと
 と入り。駒を彼處に乗り放し大薙刀に縫り。いやたんち
 たんちと漂ひ。あら苦しや兼房よ君は何處に。お座しま
 す。兼房武藏が手を引いて。御前さして参る。

ツレ判官御覽あつて。あれは武藏か。ッキさん候。ツレ聲を聞
 けば古の武藏。姿はただ鬼神の如し。羨ましやな武藏は。
 生をも變へず忽に荒人神となつたるぞや。それへくと
 仰せければ。太夫うけたまは承ると申して。落椽につんと上がり。甲
 を脱いでとうと置き。甲の袖を片敷いて今を限と見ゆる
 が。兼房を近付け。最期に若君を一目拜み申さんと云ふ。
 兼房は若君を抱き申し武藏が手にぞ渡しける。ツレ太夫兼房
 慶若君を抱き申し後の髪をかき撫で。龜割山の峠にて御
 産あらせ給ひし時に。辨慶が参り産湯を引かせ申し。男
 子は七歳迄物あやかりと承る。若君の御果報あやからせ
 給はば。伯父頼朝に御あやかり候へ。戒力は御親父判官
 弓は爲朝の御弓勢。二相を悟つて悪魔の者の恐れんは。

平の秩父にあやからせ給へ。打物召されものの骨切つて。
 人に怖ぢられたらんはその數にて候はねども斯う申
 す武藏めにあやからせ給へ。命の長くわたらせ給はんは
 三浦の大助が百六になりしに。あやからせ給へと申しし
 事の夢となり。未だ十にも足らずして。衣川の水の泡と
 消え果て給はん痛はしやと。はら／＼と歎きければあら
 痛はしや若君は何のよしみを。知召されざりしが。辨
 慶があらけなき。扮装にも怖ぢ給はず。胸板を下りに流
 るる血を御覽じていたいけしたる。御手にて搔き撫でさ
 せ給ひつつ。森々と抱き付きわつと叫ばせ給ふにぞ。御
 前の女房お末の人。兼房。武藏も。消え入る様に。泣き
 にけり。コトバツレ判官御覽あつて。武藏が最期に酒を飲ませ

よ兼房。承ると申して。長柄の銚子。紅葉の盃を御前に上ぐる。判官取り上げさせ給ひて。これは二世迄をさすぞ賜はれ。辨慶餘の忝さに。三度戴きたうたうと受け。悠々とはほしけれども。笛が切れたる事なれば。血に交りてこの酒が。胸板を下にさりくと流れけり。判官御覽あつて。武藏が最期は近づいたるぞ。念佛勸めよ。承ると申して。兼房念佛を勧めければ。寄手の兵これを聞き。城の内に念佛の聞こうるは。如何様武藏が腹を切るか。大剛の者の自害の様。いざ見習つて手本にせん。尤然るべしとて我れ先にと亂れ入る。判官御覽あつて。あは敵の近付くは。辨慶腹を切れ。兼房は防矢射よ。御經せんずる間とて御座を立

たせ給へば。辨慶は敵の呼ばはる聲音を力にし。大庭に下り。長刀に縋り又たんちくと漂ふ。判官御覽あつて。また打つて出づるか武藏。さん候。判官思ひ續けて斯く許。後の世もまた後の世も。廻り合へそむ紫の下雲の上まで。辨慶承り返歌と思しくて斯く許。六道の巷の末に待てよ君。後れ先立つ習ありとも。と斯様に申して堀の舟橋をかぶくと渡りけり。奥の軍兵この由を見るよりも。あら恐ろしや又辨慶が懸かるは。爰を引けやと云ふ儘に我れ先にとぞ逃げにける。衣川颯と追つ越し向のははたにて漂蕩する兵を十七八騎斬り伏せ。此方の端へ歸らんとしたりしが次第に性根亂るれば。西向につつ立つて薙刀眼に揺り立てて。光明眞

言稱へつつ生年三十八にして衣川の。立往生を惜まぬも
 のはなかりけり。奥方の軍兵この由を見るよりも。
 あら恐ろしや又辨慶が人をたばかつて打たんとする計よ。
 近う寄つて叶ふまじいぞ。遠矢を射よといふ儘に指し取
 り引き詰め散々に射たりけり。武藏に中たるその矢は。
 葦を束ねて檣の板戸を突く風情。固より死したる辨慶に
 て。その身をちつとも痛まず。太夫 かけりける所にぬまた
 ての庄司が申しけるは。如何に方々。到つて心の剛なる
 ものは。立ちながら死する習のあると申すに。誰かある
 弓の弾にてちつと突いて見よ。實にこれもいはれたり
 とて。二十騎三十騎。駈け寄せ。立ちけれども怖ちて
 左右なく近付かず。太夫 ぬまたての庄司がこれを見て。臆

病なる人々かな。其處退けぬまたて突かんとて。駒の手
 綱搔い繰つて。かつしくと歩ませ寄せ。弓の弾をおつ
 取り伸べ。怖づ怖づ。かつばと突いた。固より死した
 る辨慶で枯木を倒す如くに。たんぶとまろびけり。まろ
 びけるその前に。持つたる長刀ひらりとするを見るより
 も。ぬまたての庄司は。死したる者と知らずして又切つ
 て懸かると心得。氣も魂も身に添はず駒より下に轉び落
 ち浮きぬ沈みぬ流れて。衣川の堰にせかれて死んだりし
 を。貴賤上下押し並べて。悪まぬものはなかりけり。

硫黄が島

爰に門脇の平宰相教盛。折を得て小松殿に参り。大臣に申されけるは。如何に大臣聞召せ。今度後の宮の御入内に。非常の大赦を行はるべきよし承る。これは何にもすぐれたる御祈禱なり。
夫れ人のなげきを止めさせ給はば。身の喜もあるべきなり。その上丹波の少將成経。ならびに平判官康頼。法性寺の執行がこと。よきやうに御計らひあつて。今度の内に赦免ならせたまはらば。いかかは目出度候ひなん。まづ思ひても御覽ぜよ。薩摩瀧硫黄が島の。うき住居思ひやるさへ不便なり。小松殿聞召し。淨海に参りて

申さんとて。相國にかくと申させ給へば。相國聞召され。いざとよ執行は。随分は淨海が口入によつて。人と成りし者ぞかし。それに事に觸れ東山。鹿谷の謀叛に。當家をやすからず悪口しけると聞くこそ奇怪なれ。執行が事においては全う淨海は知るべからず。小松殿聞召し。御説尤にて候へども。始より同罪にて。一所の島に流し。赦免の時彼一人。めし残され候はば。なほ罪深き罪科たるべし。ただ同じ次でとぞ申されける。淨海聞召されて。いやく執行がことにおいては。全う淨海は知るべからずと。大きに怒り給へば。この上力及ばずとて。八條殿を御出あり。門脇の屋形に移らせ給ふ。明れば七月九日。薩摩瀧硫黄が島の流人は。丹波の少將成経ならびに平判

官康頼。兩人の御教書。八條殿よりも出でければ、十日の逗留にて。同じき二十日に使京を立つ。されば薩摩瀧とは總名なり。奥七島は唐土口。五島は日本。總じて島は十二。始はしらしが島。ちどりが島。硫黄が島とて三つの島へ。一人つつ流さるべきにてありしかども。門脇殿の御訴訟深きによつて。三人ながらめしあつめ。薩摩瀧硫黄が島へ流し給ふ。ある時この人々三人。あまりの徒然さに。いざや島巡して遊ばんとて。島巡をこそしたまひけれ。かつや都にて傳へ聞きしよりは。遙に越えて覺えたり。乾より巽へ。重山連つて。百千萬の雷の音絶えず。峰には雷電隙もなし。麓の里に雨降りて。昔は鬼が住みければ。

鬼界が島とも申すなり。今は又何となく。峰に硫黄が立ちければ。薩摩瀧硫黄が島と申すなり。たま〜この島に住む人は。わが住む國の人にかはり。わがいふことをかれ知らず。かれいふことをわれ知らず。男はあれども烏帽子着ず。女はあれども髪下げず。賤が山田をかへさねば。米穀の種もなかりけり。その桑をとらざれば。絹帛のたくひもなかりけり。水をむすばんとては。澤に下り。こたか木をとらんとては。山林に入りて迷ひけり。明暮月日を送りける。うき身の程こそ悲しけれ。されども少將のためには。御舅にておはします。門脇の平宰相教盛の所領。肥前の國鹿瀬の庄なりければ。少將一人の衣裳食事は。日に随つて送らせ給ふ。一人の衣裳食事は。

をもつて。二人の人をぞはこくみける。判官入道少將。一つ心に申されけるは。我等都にありし時、熊野を信じ申し。五度づつ参り今五度参り。十度に足さんと思ひしに。この島に流され。赦免もなく終に。この島のすもりと。なり果てん事こそ口惜しけれ。この島に候とも。三山をいはひ申し。我等が歸洛を。權現に祈り申すべし。さて僧都はいかゞ思召す。僧都聞召されて。山王の御事ならば然るべし。權現の御事は。さしも信心候はず。漫々たの上力及ばずとて。二人すこくと御たちあり。

る海上を見渡し。岨々とある磯邊を巡り。三つの御山に似たる所を。尋ねけり。あるひは山高うして淨水久しく流れ出づ。あるひは木々の梢れい／＼として峙り。こは本宮證誠殿。かしこは新宮かんのくら。遙の北にあたりつつ。白石の岨々とあるよりも瀧水雲より流れ出で。松の嵐も神さび。飛龍權現の御立ある。那智の御山に似たりとて。ここを那智とぞ定めける。攝津の國くぼつ王子より。九十九所の王子王子を。かたの如く勸請申し。それよりくろめに御下向あり。その間に僧都は。高き所に上り。東西南北を見渡し。よろづ観念してましましけるに。黒雲厚く隔つて。石巖崩れ海に入る。その時僧都ぜんに古き詩を思ひ出づる。風佛前に花を散

す。岸崩れて魚害す。その岸心なくして。罪を得ず。コトバ
 されば五體は五つのかり物。地水火風かたどり。心は
 虚空の如くにて。形なければ色なし。諸法は有無の二道
 にて。有とも見え。又はなし。立つても居ても座禪な
 りと。破戒無愆の高枕し起きぬ臥ぬぞしたまひける。
 この上力及ばずとて。二人又すこくと。くろめをお
 たちあるが。日數積つて裁ちかふべき。淨衣のあらざれ
 ば。麻の衣の潮に朽ちたるを。澤の水にて洗ひ。岩田川
 の清き瀬にて。煩惱の垢をすすぎ。五大王子を伏拜み。
 それよりも山路に上りければ。高原や峰の嵐に誘はれ
 て。いわうをこして參るにぞ。中天竺も遠からず。しう
 てうちかつゆくませ。河發心門にも入りぬれば。はや本

宮に着き給ふ。あら有難やこれこそ。本宮證誠殿にてま
 しませ。いざや我等が祝詞を申し。歸洛を權現に祈り申
 さんとて。散米のあらざれば。濱の眞砂子を潮に洗ひ。
 散米と定め。花を手折つて。御幣に捧げ。歸洛の祝詞を
 ぞ申されける。

再拜再拜これ當り來れる歲次治承。二年。戊戌。月の
 ならばは十月二月。日の數三百五十餘箇日。吉日良辰を
 えらんで掛巻もかたじけなくまします。日本第一大靈驗
 熊野三所權現。ならばに飛龍大薩陀の教令宇豆の廣前に
 して。信心の大施主羽林藤原の成經。ならばに沙彌性照
 一心清淨の誠をいたし。三業相應の志をぬきんで。謹ん
 でもつて敬白。

夫れ證誠大菩薩は。濟度苦海の教主。三身圓滿の覺王たり。兩所權現は。東方淨瑠璃醫王の主。衆病悉除の如來なり。あるひは南方普陀落能化の主。入重玄門の大士若王子は。娑婆世界の本主施無畏者の大士頂上の。佛面を現じて。衆生の諸願を満てしめ給ふ。故に上一人をはじめ。下萬民に至るまで。あるひは現世安穩。または後世善所のために。朝には淨水を掬んで。煩惱の垢をすすぎ。夕には深山にむかつて法號を唱ふるに。感應息ることなし。峨々とする峰の高きをば。神徳の高さにたとふ。涓涓とある谷の深きをば。弘誓の深きに擬らへ。雲を分け。て上り露を凌いで下る。ここに利益の地を頼まずんば。如何歩を險難の地に運ばんや。權現の徳を仰がずんば。

なんぞ必ずしも。幽遠の境にましまさんや。よつて證誠大權現。ならびに飛龍大菩薩。青蓮慈悲の御眼をならべ。さを鹿の御耳をふり立てて。我等が無二の丹精を知現して。一々の懇志を納受せしめ。給へ。まの御兩所權現は。各機にしたがつて。あるひは有縁の衆生を導き。又は無縁の群類を救はんがために。七寶莊嚴の住家を離れ。八萬四千の光を和げ。かりに垂跡と現じ。六道三有の塵に同じ給へり。故に定業亦能轉求長壽得長壽禮拜袖を連ね。幣帛禮奠を捧ぐる事。隙もなし忍辱の衣を重ね。覺道の花を捧げ。神殿の床を動し。信心の水を清いては。利生の池に湛へたり。神明納受ましますば。諸願なんぞ成就せざらんや。願くは十二所權現。利生の翼をつらね

て。遙に苦海の空を翔つて。左遷の憂を休め。歸洛の本
懐を見せしめ給へ。再拜再拜と禮拜して。淨衣の袂をし
ぼるは。有難くこそ聞えけれ。

文覺

コトモ
そもく源氏の御代を開かせ給ふべき。瑞相ともこ
そ多かりけれ。その故いかにと尋ぬるに。もとは攝津の
國渡部源氏の大將に。遠藤武者遠房がその子に。遠藤瀧
口盛遠と申せしが。出家して戒名を文覺とこそ申しけれ。
その頃あらざる大願を起し。眞言教に心をかけ。酷熱の
暑きに笠をも着ず。立冬の冴ゆる夜衾の數をも重ねず。
大峰葛城を七度まで通り。熊野の那智の瀧に。三七日打
たれ。正身大聖明王に逢ひ奉りしかば。すでに權者とし
そ聞えけれ。その後都へ上り。愛宕山の麓。高雄の神護
寺と申す古寺に御座ありしが。かかる上は佛閣を建立せ